

後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

具 同 中 山 遺 跡 群

第2分冊 1991年度

1992・3

高 知 県 教 育 委 員 会
財高知県文化財団埋蔵文化財センター

後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

具 同 中 山 遺 跡 群

第2分冊 1991年度

1 9 9 2 · 3

高 知 県 教 育 委 員 会
財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



古代・中世検出遺構



SK 2 遺物出土状況

序

高知県教育委員会では、建設省四国地方建設局の委託を受けて昭和 61 年度から継続して中筋川の河川改修に伴う緊急発掘調査を実施しておりますが、平成 3 年度より(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの開設に伴い、高知県文化財団が高知県教育委員会より再委託を受け実施しました。

本書は、平成元年度から 3 年度にかけて調査を実施しました具同中山遺跡群の調査のうち、平成 3 年度分の成果をまとめたものです。縄文時代から近世までの複合遺跡として、県内でも貴重な資料を得ることができました。特に古墳時代の祭祀跡や、中世の集落及び土壙墓等が検出され、古墳時代の祭祀遺物や土壙墓からの中国産の青磁碗等、遺跡の性格を窺わせる資料も出土しています。この報告書が埋蔵文化財の保護・保全、更には今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、建設省四国地方建設局の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、関係各位から寄せられました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成 4 年 3 月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 小橋一民

例 言

- 本書は、中筋川の河川改修工事に伴う埋蔵文化財——共同中山遺跡群の平成3年度発掘調査報告書である。
- 調査は、建設省四国地方建設局より、高知県教育委員会が委託を受け、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。発掘調査期間は、平成3年5月9日から平成3年10月24日まで、出土遺物整理作業及び報告書作成は平成3年度に実施した。
- 調査体制は次のとおりである。

調査員 江戸秀輝(高知県文化財団埋蔵文化財センター調査員)

タ 前田光雄()

タ 松田直則()

調査補助員 藤方正治(高知県文化財団埋蔵文化財センター調査補助員)

庶務 山崎浩(高知県文化財団埋蔵文化財センター事業課長)

タ 三浦康克(高知県文化財団埋蔵文化財センター主事)

- 本報告書の作成及び編集は高知県教育委員会、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが行った。編集実務については藤方が行い、本文執筆は江戸・藤方・前田がそれぞれ分担し、文末に執筆者名を記した。
- 出土遺物の写真図版中の番号については、実測図の番号と一致している。
- 遺構については、祭祀跡と考えられる集中地点をSF、土壙をSK、掘立柱建物跡をSB、溝状遺構をSDで表示した。
- 報告書に掲載の縮尺率は、それぞれに示した。高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
- 出土遺物、その他の関係資料は、高知県文化財団埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 現場作業員並びに整理作業員は以下に記したとおりである。

現場作業員

大久保友春・岡上悦美・岡上孝子・岡上瑞枝・岡上定美・岡本末広
岡本寿美子・岡本弘美・岡本光子・沖和子・尾崎幸美・柿葉常男
桑原照美・瀬尾操・地引博司・長崎桂子・中山米尾・中山末子
布ツルキ・布陽子・野並穂・橋田逸於・浜田昌一・浜田雅
林延子・前田啓子・正木信邦・松本俊彦

整理作業員

井上博志・日本由里・大原喜子・小松経子・竹村延子・中西純子
浜田翠代・松木富子・矢野雅・山中美代子・山本利恵・山本典代
山本裕美子・吉本睦子・西内宏美

10. 調査にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所及び第一出張所、中村市教育委員会の御協力をいただいた。また、以下の諸氏から御協力・御助言をいただいた。記して感謝したい。

岡本健児・木村剛朗・曾我貴之・出原忠三・廣田佳久・森田尚宏

報 告 書 要 約

1. 遺跡名 具同中山(ぐどうなかやま)遺跡群
遺跡番号 070052 遺跡地図 No.22-46
2. 所在地 高知県中村市具同中山 1254-6
3. 立地 中筋川下流域左岸 沖積地 標高 1~5 m
4. 種類 繩文時代(遺物包蔵地)、弥生~古墳時代(祭祀跡)、奈良~平安時代(遺物包蔵地、集落跡)、鎌倉~室町時代(遺物包蔵地、集落跡)。
5. 調査主体 高知県文化財団埋蔵文化財センター・高知県教育委員会
6. 調査契機 中筋川河川改修
7. 調査期間 1991年5月9日~同年10月24日
8. 調査面積 2,600 m²
9. 検出遺構 (弥生時代) 焼上・炭化物集積地点を中心とする祭祀跡数基。(古墳時代) 祭祀跡3基。(中世) SB 8棟、SD 2条、土壙墓2基、柱穴200個。(近世) 集石遺構1基、石列遺構1基。
10. 出土遺物 (縄文時代) 晩期深鉢・打製石斧。(弥生時代) 前期高杯・壺・壺・瓢。(古墳時代) 土師器の壺・壺・高杯・須恵器の壺・瓶・杯・高杯・手捏ね土器・土製の勾玉・鏡・滑石製の臼玉・石器など。(古代・中世) 土師器の皿・杯・椀・鍋・羽釜・青磁碗・白磁碗・石鍋・常滑焼の壺など。
11. 内容要約 今回の調査は1989年度から実施されて來た調査の最終年度に當り、縄文時代から中世に亘る良好な資料を得た。縄文時代の遺物は、打製石斧・石刀・晚期の深鉢であり、標高1.5m付近からの出土である。弥生時代の遺物では、前期の縞衫紋を持つ高杯が出土しており、古いものは単独で、又、新しいものについては焼土や炭化物と共に出土する傾向にある。古墳時代の祭祀跡はSF 19~21の3ヶ所が存在する。SF 19は、須恵器を中心とした祭祀跡であるが遺物は散在しており、祭祀の縁辺部であると考えられる。SF 20・21は、土師器を中心とする祭祀跡であり、標高3.5m付近で検出された。古代・中世の遺物の多くは標高4.5m付近の遺物包含層2層からの出土であり、遺構は調査区の北西部で200個に及ぶ柱穴群等を検出した。柱穴群に南接する土壙墓は火葬墓と考えられ、鎌蓮弁紋を持つ青磁碗が4個体、他に土師器鍋・白磁碗などが出士している。

本文目次

序

例言

報告書要約

本文目次

挿図目次

第1章 調査の方法と経過	1
1) 調査の方法	1
2) 調査の経過	1
第2章 基本層序	3
第3章 遺構と遺物	5
第1節 繩文時代	5
1) 出土状況	5
2) 出土遺物	5
第2節 弥生時代	5
1) 出土状況	5
2) 出土遺物	5
第3節 古墳時代	15
1) 出土状況	15
2) 出土遺物	16
第4節 中・近世	39
1) 棟出遺構	39
2) 出土遺物	48
第4章 総括	56
写真図版	

挿 図 目 次

- | | |
|--------------------------------|-----------------------|
| 第1図 調査区グリッド設定図 | 第14図 SF 21 出土遺物実測図(2) |
| 第2図 北壁セクション | 第15図 SF 21 出土遺物実測図(3) |
| 第3図 弥生時代遺物出土位置図(上)
垂直分布図(下) | 第16図 SF 21 出土遺物実測図(4) |
| 第4図 縄文時代遺物実測図 | 第17図 中・近世遺構全体配置図 |
| 第5図 弥生時代遺物実測図(1) | 第18図 SB 1～4 実測図 |
| 第6図 弥生時代遺物実測図(2) | 第19図 SB 5～8 実測図 |
| 第7図 弥生時代遺物実測図(3) | 第20図 SD 2 実測図 |
| 第8図 SF 19 遺物出土状況図 | 第21図 SK 2 実測図 |
| 第9図 SF 21 遺物出土状況図 | 第22図 集石平面実測図 |
| 第10図 SF 19 出土遺物実測図 | 第23図 丸跡 I 実測図 |
| 第11図 SF 20 出土遺物実測図(1) | 第24図 炉跡 II 実測図 |
| 第12図 SF 20 出土遺物実測図(2) | 第25図 中・近世遺物実測図(1) |
| 第13図 SF 21 出土遺物実測図(1) | 第26図 中・近世遺物実測図(2) |
| | 第27図 中・近世遺物実測図(3) |

第1章 調査の方法と経過

1) 調査の方法

平成元年2年度調査に引き続き、平成3年度の具同中山遺跡群発掘調査を実施した。本年度調査においては、本年度調査対象区の西端、上流側より仮称1区、2区（1区、2区は隣接する）、平成元年・2年度の調査区の北部分を3区として発掘区を設定し、発掘調査を行う。

本年度調査区1・2・3区の遺物取り上げや遺構の実測は、昭和61年度に実施した具同中山遺跡群発掘調査の際に設けたトラバースポイントを基準に、新たにトラバースポイントを設定し、まず $20 \times 20\text{ m}$ 方眼を組み、南北をアルファベット、東西を数字で表し、さらに $4 \times 4\text{ m}$ 方眼に分けて行った（第1図）。

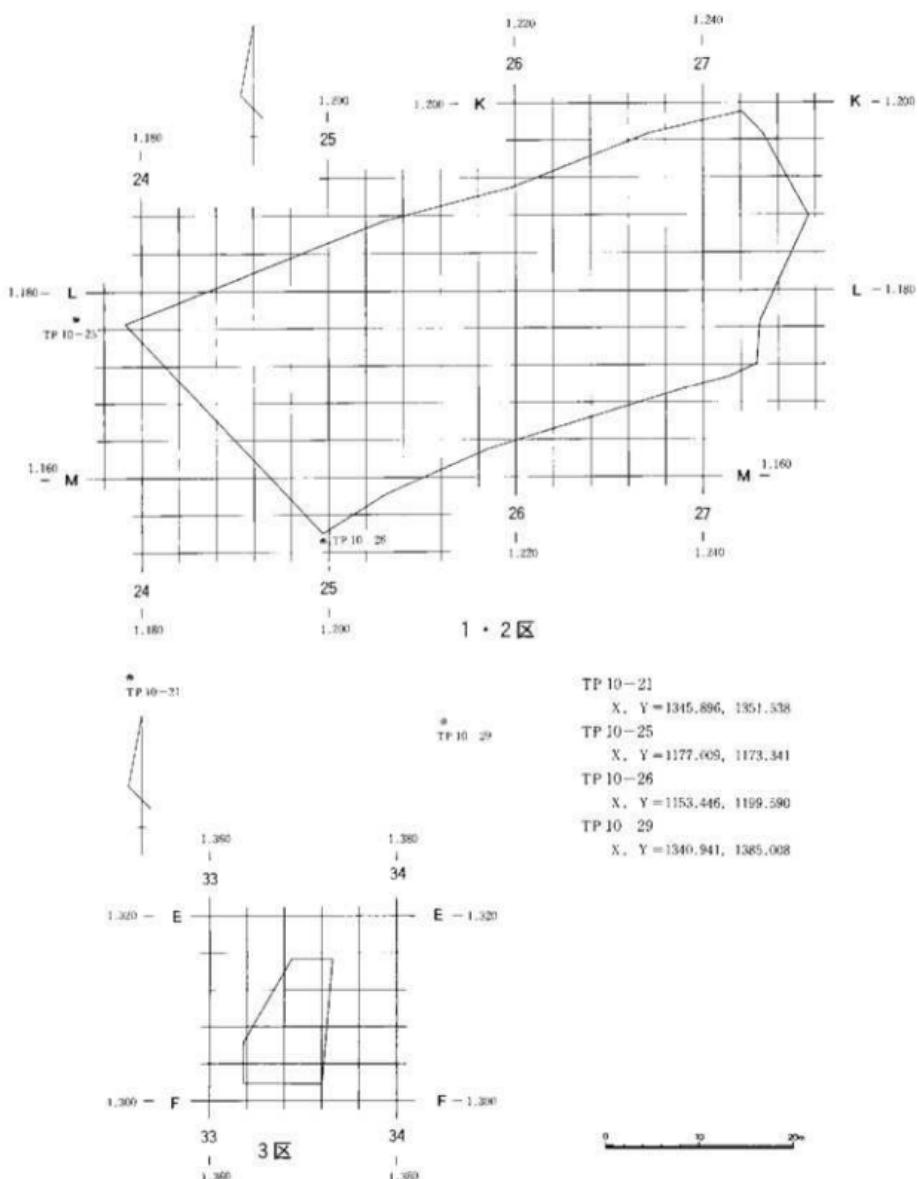
発掘調査は表土を重機により除去し、中世の遺物包含層面まで掘り下げを行い、遺物包含層確認後は人力による掘り下げを行う。遺物は出土地点とレベルの測量を行い、図化及び写真撮影を行う。遺構は検出後、柱穴跡は半截し、土層堆積状況を観察した後、完掘し平面図を作成し写真撮影を行った。溝状遺構等については数カ所ずつ土層堆積状況を測量、図化し、写真撮影を行った。各調査区、遺構検出面において、それぞれの遺構完掘後に全景写真を撮影した。

2) 調査の経過

発掘調査は1・2区については、中世の遺物包含層面及び遺構は柱穴・土礫墓・溝跡を検出した。測量、写真撮影等諸調査完了後、中世の検出面の下層で、古代の遺物包含層面を確認し、中世同様調査後、さらに下層の確認作業を行った。掘り下げの結果、古墳時代全般の遺物包含層面を確認し、その出土遺物には祭祀に用いられたと思われるものが多く、それより祭祀跡2カ所を確認した。遺物出土状況を測量、図化し、祭祀跡を明確にし、写真撮影後遺物を取り上げた。さらに下層より、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物包含層面を確認した。他の時期同様調査後、下層に掘り進んだところ、1区より、縄文時代晚期の土器片と石斧が出土した。以上の結果、検出遺構面について4面が確認されたこととなる。

3区については、1・2区同様、まず、表土を重機により除去し、中世の遺物包含層面及び遺構の検出作業を行うが、同時期の遺物及び遺構は検出されず、古代についても同様であった。さらに下層より、古墳時代の遺物包含層面を確認し祭祀跡1カ所を検出した。測量、写真撮影、遺物取り上げ後、古墳時代の検出面の下層を調査したが、遺物・遺構共に検出されなかった。

発掘調査面積は $2,600\text{ m}^2$ である。調査完了区については埋め戻しを行い、随時整理作業を行い本書の作成にあたった。（江戸）



第1図 調査区グリッド設定図

第2章 基本層序

1991年度の中筋川の発掘調査区における、基本層序は大きくⅠ層からⅩ層迄分けることができる（第2図）。この内遺物を包含していた層は、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅹの各層であり、明確な造構が確認できたのは、Ⅵ層とⅨ層であった。以下それぞれに付いて少し詳しく見ていく。

Ⅰ層・Ⅱ層 近・現代の耕作に関わるものである。

Ⅲ層 調査区の北側では層序図に見る様に明らかな堆積をみるものの、南へ行くに従い近・現代耕作に伴う削平によって極く薄い状態で検出された。造構等は確認されず、出土遺物より中世遺物の包含層と思われる。明褐色土層である。

Ⅳ層 この直下のⅤ層を基盤とする造構の埋土はこの層を基本とする。中世の遺物を多く含む。暗褐色土層である。

Ⅴ層 この層の上部で柱穴を中心とした造構群を検出した。段階的に幾度か生活面が存したものと考えられるが、断面では観察できなかった。中世の遺物を多く含む。黄褐色土層であり、縮りがあり粘性がなく、茶褐色の斑点を多く含む。

Ⅵ層 この層と下のⅨ層の境は明確でなく、色調も場所によって若干違いが認められた。灰褐色土層であり、縮りがあり粘性もあり、鉄分を多く含む。

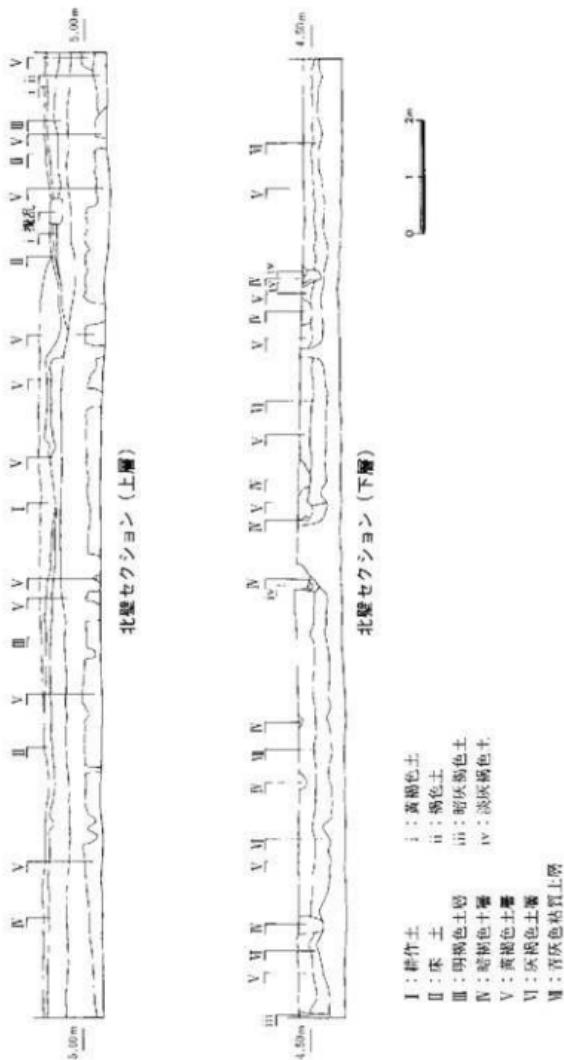
Ⅶ層 古墳時代祭祀跡、弥生時代祭祀跡を検出したのはこの層である。前者は標高3.50mにおいて、後者は標高3.00mで検出した。青灰色粘質土層であり、縮りがあり粘性も強い。

Ⅷ層 遺物等は確認されなかった。色調はⅨ層に較べてやや黒色を帯び、粘性も強い。厚さは調査区中央部で約50cmを測る。

Ⅹ層 楽文晩期土器破片や打製石斧、台石を検出したのは標高1.50m附近であった。緑色を帯びた青灰色シルト層である。

調査区の西側は中筋川の旧河道内に当るためか、上に示す様な層の堆積状況は確認できなかった。（著者）

第2図 北壁セクション



第3章 遺構と遺物

第1節 縄文時代

1) 出土状況（第3図）

今回の調査で検出した遺構及び遺物で最も標高が低い部分からのものは、焼上跡と縄文晩期土器片であり、標高1.46mからの出土であった。直径0.5~1mのほぼ円形を呈して検出される焼土と炭化物の集積地も匂層の標高1.50m周りに存在した。調査区の北端における匂層内から台石として使用されたと考えられる40cm大の平らな石も検出されている。（藤方）

2) 出土遺物（第4図1, 2）

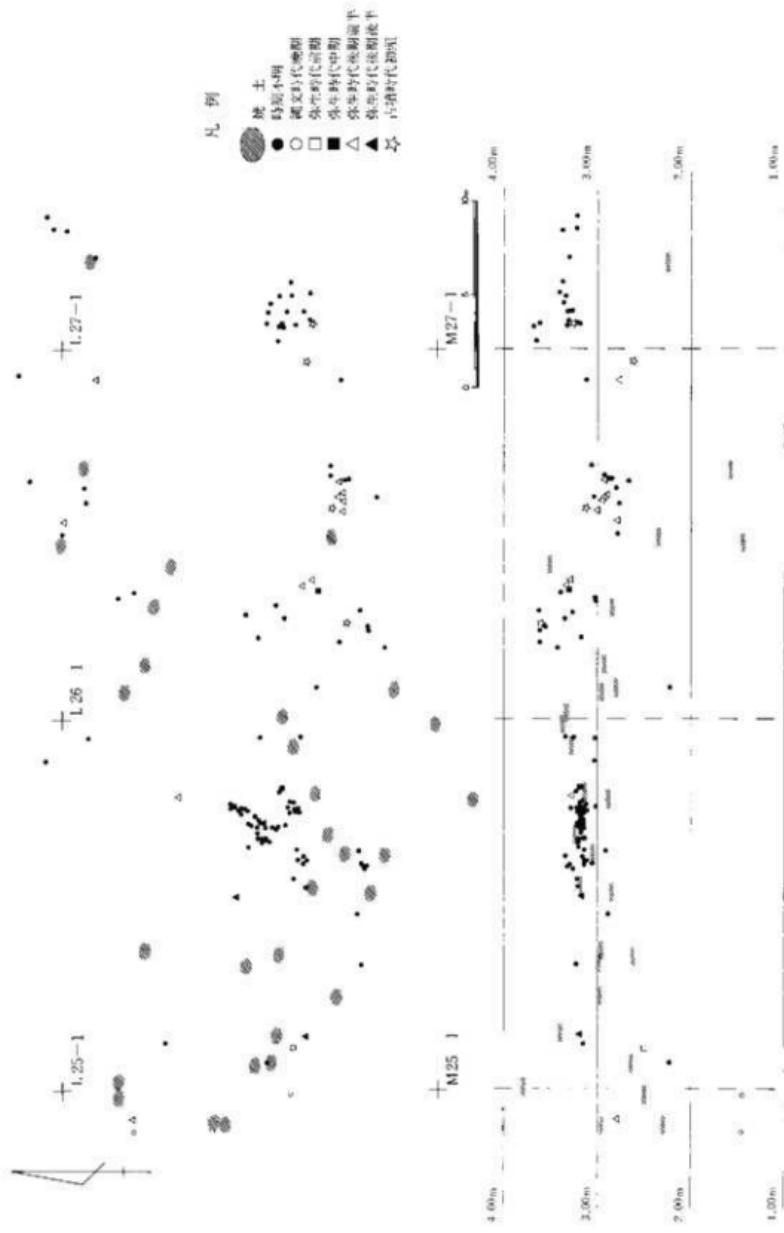
1は縄文時代晩期の刻目突帯文土器である。胸部の曲折部に突帯を施し、突帯上に刻目を入れる。外面にはやや粗い条痕がみられ、内面はナデる。中村市中村貝塚を様式とする晩期後半の中村Ⅱ式に相当するものと思われる。

2は撥型を呈する打製石斧である。全長14.2cm、最大幅7.8cm、最大厚2.6cmを測る。裏面は大きく打ち欠き、平坦面を利用し、表面は右側縁を数度に亘り敲打し、左側縁は大きく敲打した後、僅かに調整するのみである。刃部は広く中央部を大きく敲打し、左右を数回敲打調整刃部を作出している。石質は頁岩製か。（前田）

第2節 弥生時代

1) 出土状況（第3図）

古墳時代の祭祀跡に匹敵する規模を持つ祭祀跡は匂層下部以下では確認できなかったが、祭祀の痕跡は多くの資料を得る事ができた。先ず、焼上及び炭化物は直径50cm程度のほぼ円形を呈して、標高1.50m周りから検出されている。弥生時代の出土遺物で最も深いものは標高2.24mで出土した弥生中期の甕である。炭化物等の集積で時期が確定できるのは、標高2.51mから弥生土器の高杯を伴って検出されたものである。以降、標高3m付近迄炭化物のみ、焼土のみ、焼土と炭化物それぞれの集積地点が数多くみられ、標高3.20mで2ヶ所の弥生土器



を伴う祭祀跡を確認する。

一つはL25-14, L25-19グリッドを中心に出土した弥生土器の壺と20cm大の河原石。それらに隣接して直径1mのほぼ円形を呈した焼土と炭化物の集積が4ヶ所ある。炭化物の中に土器を含むものも存在した。

もう一ヶ所はL26-18, 19グリッドで検出された弥生土器を伴う集石である。石は河原石で最大でも10cm大である。直径1mのほぼ円形の範囲内に石を敷き詰めた状態で検出され、周辺に弥生土器の壺、瓶等を出土している。(藤方)

2) 出土遺物 (第5~7図3~43)

3は高杯の脚部である。調査区西部のL25-16グリッドの標高2,515mからの出土である。脚部から杯部への変換点に、刷毛状工具による綾杉紋を施した断面三角形の小突帯を廻らす。また、脚部内面には半截竹管による押圧痕を留める。

4~12は壺である。4はL26-20グリッドの第Ⅲ層からの一括出土である。直線的に外上方に向う口縁部と外面に施された細かな刷毛目を持つ。5はL25-15グリッドの標高3,205mからの出土である。頸部から大きく外反し短い口縁部が付く。6はL25-12グリッドからの出土である。粘土帶を貼付し肥厚した口縁部を持つ。7~9はL25-14グリッドからの出土であり、標高はそれぞれ3,177m, 3,21m, 3,178mであった。7・8は緩やかに外反する口縁部を持つ。9は直線的に外上方に向う口縁部を持つ。10・11は共にL26-12グリッドからの出土であり、標高は10が3,354m, 11が3,19mであった。两者共、口縁部は外面に粘土帶を貼付し肥厚する。12は調査区西部の第Ⅲ層から出土した。頸部からやや外反する口縁部を持つ。

13~16は甕か壺の底部である。13はL26-17グリッドの標高3,324mから出土した。粗い原体による刷毛目を持つ。14はL25-14グリッドの標高3,172mから、15はL26-4グリッドの標高2,818mからの出土である。16はL25-15グリッドの第Ⅲ層から一括出土であり、体部下端に箆状工具による圧痕を残す。

17~19は壺である。17は口縁部の破片である。L25-14グリッドの標高3,207mからの出土である。口縁端部は外側に粘土帶を貼付し肥厚する。18はL25-14グリッドの標高3,175mからの出土である。明褐色灰色を呈し、体部中位外面に煤が付着する。19はK25-20グリッドの標高3,052mからの出土である。大きく開く口縁部を持ち、口縁端部には粘土帶を貼付し上下に肥厚する。この粘土帶の外面には刷毛目、内面には刻み目が施される。

20は小型の壺である。L25-19グリッドの標高3,168mからの出土である。口縁部直下に頸部を有する。内外面に撫で調整を施し、端整な仕上がりを示す。21は鉢と考えられる。底部が欠損している。L26-4グリッドの標高2,815mからの出土である。体部は内溝ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸く收める。

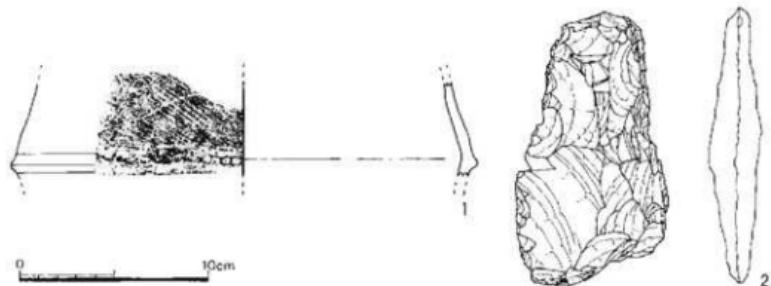
22~24は壺か壺の底部である。何れも調査区中央部南で検出された祭祀遺構と思われる小石の集中部分からの出土である。22・23は共にL26-19グリッドから、24はL26-18グリッドからの出土である。標高は23が3.057mであり、24が3.019mを測る。22~24の内外面には煤の付着を見る。

25~35は壺である。25・28・33は粗い刷毛原体による調整を、外面では縱方向に、内面では横方向に施したものである。25はL24-10グリッドの第V層の一括出土である。28はL26-19グリッドの標高2.953mから、33はL26-18グリッドの標高3.019mからの出土である。26はL25-14グリッドの標高3.195mからの出土である。これは体部上位で丸く内湾し頭部で大きく外反して口縁部で聞くものである。27はL25-9グリッドの標高3.295mからの出土である。体部は内湾ぎみに立ち上がり、内面には施削工具による撫でを施す。29はL26-10グリッドの標高3.257mからの出土である。底部は中央でやや下方に膨らんだ平坦面を呈し、内外面ほぼ全域に刷毛目を施す。30はL25-9グリッドの標高3.198mからの出土である。内面に成形時の粘土帯接合痕と指頭圧痕を留める。31はL26-17グリッドの標高3.302mからの出土である。外面に粗い刷毛目を施し、体部下位より口縁部に至るまで煤の付着部を見る。32はL26-17グリッドの標高3.337mからの出土である。最大径を口縁部に持ち、体部外面中位以上に煤が付着する。34は調査区東部からの一括出土である。灰白色を呈し、体部外面中位以上に煤の付着部分を見る。35はL26-18グリッドの標高2.964mからの出土である。口縁部を欠損している。内面に成形時の粘土帯接合痕と指頭圧痕を留め、体部外面の下位から頸部にかけて煤が付着する。

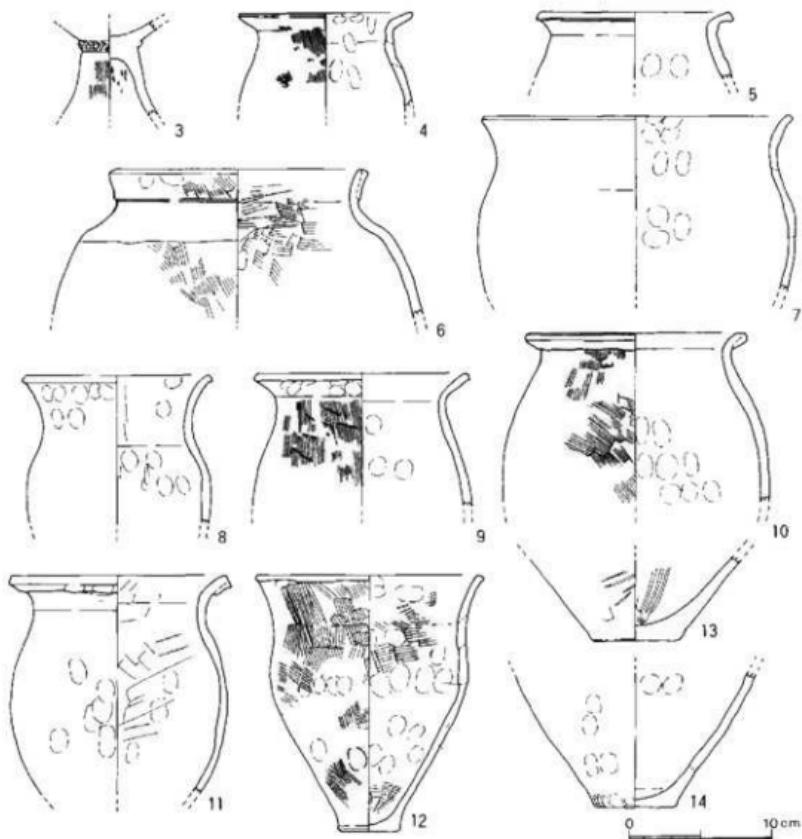
36は瓶である。L26-19グリッドの標高2.919mからの出土である。形態は同時期の壺と同じであるが、底部に直徑5mmの穴が穿たれている。瓶として形成されたものではなく、本来壺として形作られたものに穿孔を施したものである。体部外面には下位から煤の付着が見られ上位にまで達する。

37~39は壺か壺の底部である。37はL26-19グリッドの標高2.91mからの出土である。体部下位で外上方に大きく聞く、外面には下位から煤が付着する。38はL26-18グリッドの標高3.019mからの出土である。平坦な底部は中央部分で下方にやや膨む。体部外面下位に煤の付着を見る。39はL25-10グリッドの標高3.23mからの出土である。底部の平坦面は小さく、体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。

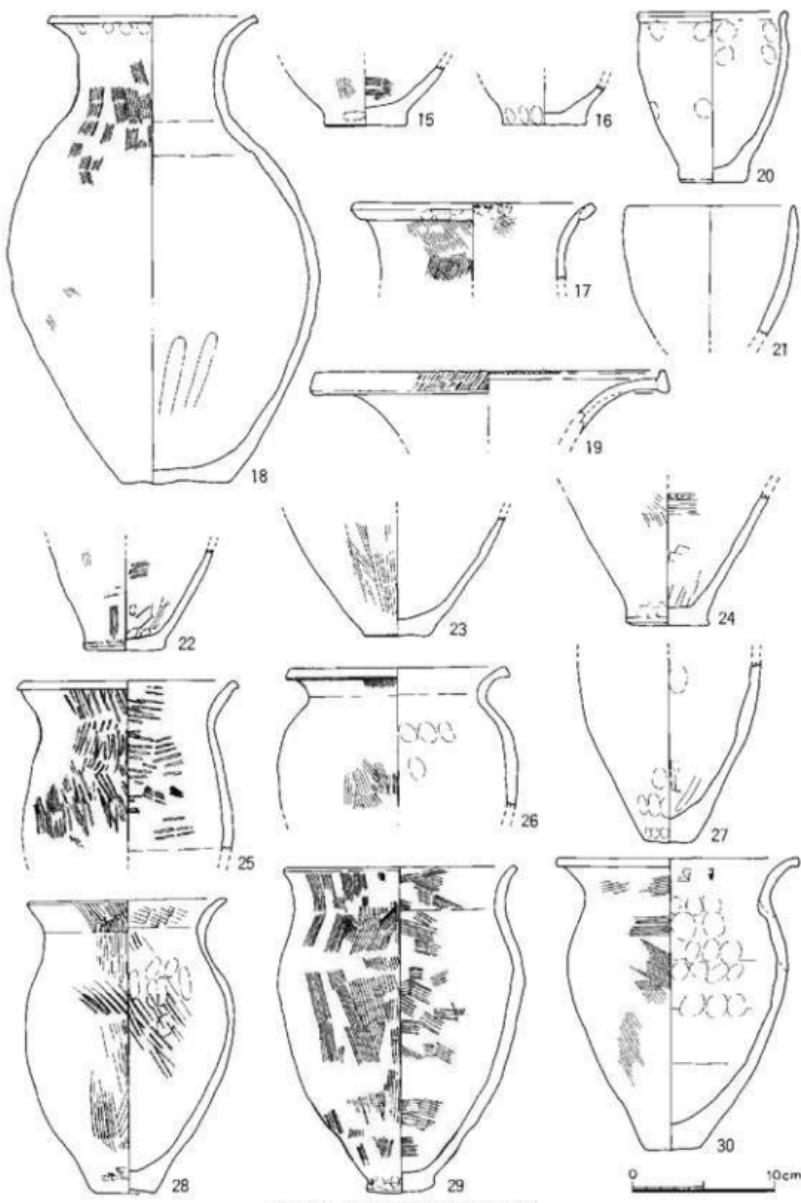
40は壺の頭部である。L25-9グリッドの標高3.213mからの出土である。頭部外面に斜格子の刺み目を施した突帶が付く。41は壺である。L26-12グリッドの標高3.045mからの出土である。内外面に粗い刷毛原体による調整を施し、頭部内面には施削り痕を留める。42は鉢である。平坦な底部の縁は丸味を帯び内湾する体部へと続く。体部外面に叩き目を施す。43は体部下位が底部端から大きく外上方に聞くことから壺の底部と考えられる。L25-13グリッドの標高3.184mからの出土である。体部下位に煤の付着部分や赤変部分が見られる。(藤方)



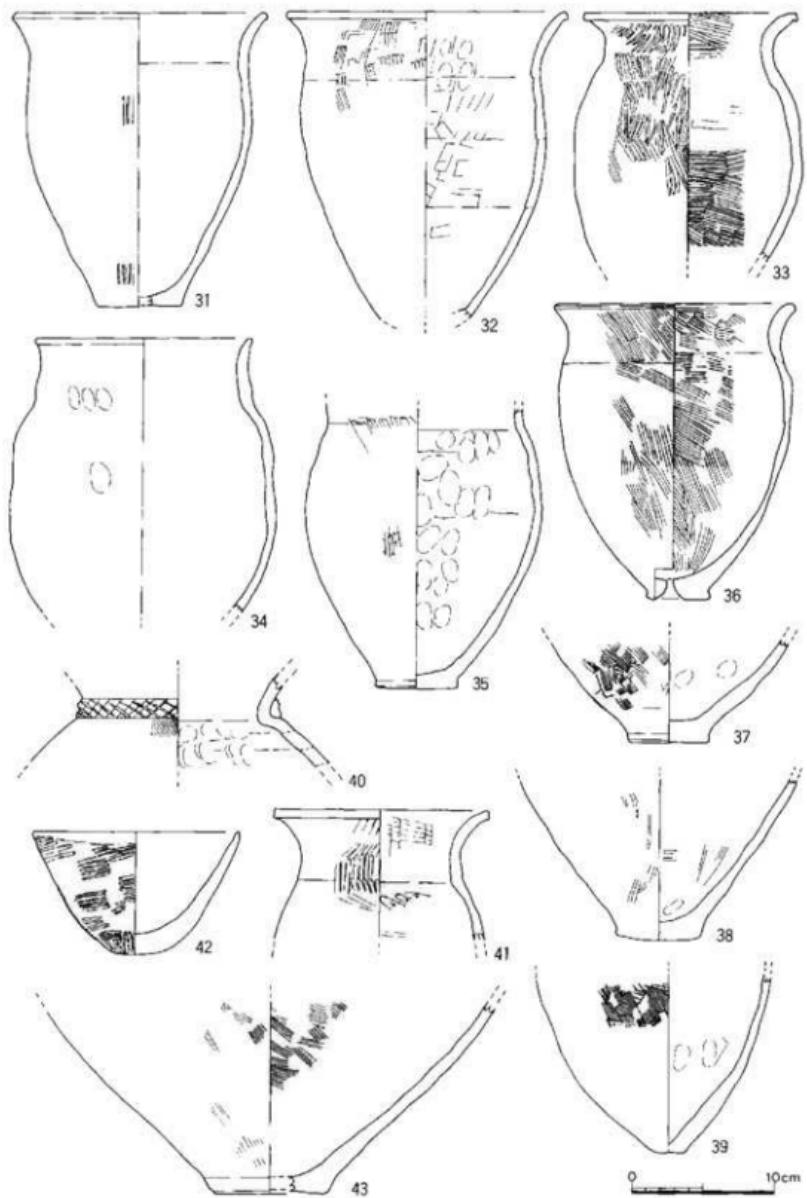
第4図 縄文時代遺物実測図



第5図 弥生時代遺物実測図(1)



第6図 弥生時代遺物実測図(2)



第7図 弥生時代遺物実測図(3)

標識番号	遺構番号	器種	口述 基準 種類 既往	形態・文様	手 法	備考
3 - 3	L25-16	高杯	— — — —	脚部から頸部への変遷点に斜面上 角形の小突起をもたらす。	外然内面、脚部外面に刷毛溝型、 脚部内面に半載管状の指添板を残す。 小突起に刷毛状工具による被刃紋を残す。	
4 - 4	L26-20	碗	— — — —	腹から外反する頸部から口縁部は 直線的で外上方に向う。口縁部は 丸くおどめる。	外輪は刷毛溝型、内面には指添 板を残る。体部上方外面に擦 が付着する。	
4 - 5	L25-15	タ	— — — —	底部から大きく外反して口縁部に 至る。口縁部は肥厚し、外輪する 面をなす。	口縁部内外面に擦り調整を施し 体部内面には指添板を残す。	
4 - 6	L25-12	+	— — — —	体部上方に弱い細胞部を持ち、頂 部からやや外反して口縁部に至る。 口縁部は粘土帶を施し肥厚 する。	外輪は刷毛溝型のち頭部以上で 横で調整。内面は擦り調整のち 口縁部で横で調整。体部上位と 口縁部の外面に擦りが付着する。	
4 - 7	—	+	— — — —	頂部から腹から外反してに傾部に至る。 口縁部は外輪する面をな す。	内輪部に横で調整。口縁部外面 に擦り調整を施す。内面に指添 板を残し、頭部に擦りが付着す る。	
4 - 8	—	+	— — — —	顶部は腹から外反して口縁部に至 る。口縁部は下方にやや肥厚し、 外輪する面をなす。	外輪は横で調整を施し、頭部下 部に指添板を残す。	
4 - 9	L25-14	+	— — — —	腹から外反する頸部から口縁部は 外上方に向う。口縁部は下方に 肥厚し、外輪する面をなす。	外輪は腹部以下頭部に調整を施し、 口縁部で指添板を残す。体部 内面に指添板を残す。	
4 - 10	K26-16	+	— — — —	頸部で「く」の字状に外反する。 口縁部外面に粘土帶を施し肥厚し、 口縁部は外輪する面をな す。	体部外面は刷毛溝型、颈部から 口縁部にかけて横で調整を施す。 体部中位外面に擦りが付着す る。	神奈系
4 - 11	L26-12	タ	— — — —	腹部は瓶から外反して口縁部に至 る。口縁部外面に粘土帶を施し肥 厚する。口縁部は外輪する面をな す。	体部外面に刷毛溝型のち横で調 整を施し、指添板が残る。体 部外面中位に擦りが付着する。	
4 - 12	—	タ	— — — —	平底な底盤を持つ。底部は底部基 部にやや肥厚する。	内輪部に刷毛溝型を施し、指添 板を残す。	
4 - 13	L26-17	高杯	— — — —	平底な底盤を持つ。底部は底部基 部から直線的に外上方に立ち上がる。	内輪面に弱い原体による刷毛溝 型を施す。	
4 - 14	—	+	— — — —	平底な底盤を持つ。	内輪面に指添板を残す。体部 中位に擦りが付着する。	
4 - 15	L26-4	+	— — — —	平底な底盤を持つ。 — — — —	体部外面に刷毛溝型を施し、端 部に指添板を残す。内面は刷 毛溝型を施す。	
4 - 16	L25-15	+	— — — —	平底な底盤を持つ。	体部外面に指添板及び底板工具 による底板を残す。	
4 - 17	—	+	— — — —	底部から腹から外反し口縁部に至 る。口縁部外面に粘土帶を施し肥 厚する。	内輪部に刷毛溝型を施し、口縁 部に指添板を残す。	
4 - 18	L25-14	+	— — — —	平底な底盤を持つ。底部はやや外 反し、口縁部で圓く。口縁部で 下方にやや肥厚し外輪する面をな す。	外輪は刷毛溝型を施し、口縁部 に指添板が残る。内面に指添 板による底板を施す。	

種別番号	遺構番号	器種	寸法 器高 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
6 - 19	L-25-20	壺		24.4 頂部から大きく外反して口縁部に 14.6) 着る。口縁部は駆士帶を付ける — 下方に肥厚させ、外輪する面をな — す。	口縁部外側には刷毛調査を施す。 口縁部の上面に組み具。外面 には刷毛りを施す。	
* - 20		壺		10.4 平坦な底部を持つ。口縁部は侈か 12.4) に認められる底部から外上方にや — や外輪する。 4.4	内部面に擦れ調査を施し、指痕 底部が残る。外部中位外面に擦 れが付着する。	
* - 21	L-26-4	鉢		11.6 体部は内凸部に外上方に立ち上 19.3) がり口縁部に至る。口縁部は丸 — くおさめる。	体部中位前面に擦れが付着する。	神奈系
* - 22	L-26-19	底部		— 平坦な底部を持つ。 17.3) — 平坦な底部を持つ。器体は底部 — から内凹の外上方に立ち上がる。 5.1	内部面に刷毛調査を施す。体部 下底内面に指痕底部を残す。体 部中位外側と底部内面に擦れが付 着する。	
* - 23	*	*		— 平坦な底部を持つ。器体は底部 18.6) から内凹の外上方に立ち上がる。 4.7	粗い立体による刷毛調査を外面 に施す。内面と体部中位外側に 擦れが付着する。	
* - 24	L-26-18	*		— 平坦な底部を持つ。 19.5) — 平坦な底部を持つ。器体は底部 — から内凹の外上方に立ち上がる。 6.0	外面は刷毛調査を施し、体部下 底で施削のち擦れ調査を施す。 内部は刷毛調査のち擦れ調査を 施す。内面に擦れが付着する。	
* - 25	L-24-10	壺		15.2 底部はやや外反し。口縁部は直線 12.3) 的に外上方に四角。口縁部は外 — 面に施す。底部中位前面に擦れ — が付着し外輪する面をなす。	粗い立体による刷毛調査を内外 面に施す。内面と体部中位前面に 擦れが付着する。	
* - 26	*	*		15.2) 底部から大きく外反して口縁部に 10.0) する。口縁部は下方にやや肥厚 17.2) し外輪する面をなす。	外面は刷毛調査のち擦れ調査を 施す。内面に指痕底部を残す。	
* - 27	*	*		— 底部は狭小な平坦面をなす。 13.1) — 底部は狭小な平坦面をなす。 — 3.5	体部下位外側に指痕底部を残す。 内部は底部外側による擦れ調査、 指痕底部を残す。外面に指痕底 部が付着する。	
* - 28	*	*		14.0 中央部でやや膨らむ底部を持つ。頭 21.3) 部は瓶輪から外反して口縁部に至る。 4.8 口縁部で外輪にやや肥厚する。 4.0	内外面に刷毛調査のち口縫 部に擦れ調査を施す。体部中段 以上の中位に擦れが付着する。	
* - 29	L-25-10	*		16.0 平坦な底部を持つ。頭部でやや外 33.5 反し口縁部に至る。 — 5.0	内外面に刷毛調査を施す。体部 上位と口縁部の外面に擦れが付 着する。	
* - 30	L-25-9	*		16.6 底部は狭小な平坦面をなす。頭 20.8) 部は瓶輪から外反して口縁部に至る。 15.3 口縫部はやや下方に肥厚し、外輪 — する面をなす。	外面と口縫部内面に刷毛調査、 口縫部は擦れ調査を施す。体 部中位に指痕底部を残す。体部 中段以上の外面に赤茶色の擦 れが付着する。	
7 - 31	L-26-17	*		17.6 平坦な底部を持つ。頭部でやや外 — 反し口縁部に至る。 16.0 口縫部は下方にやや肥厚し外輪 — する面をなす。 6.0	外面に粗い刷毛調査を施す。	
* - 32	*	*		19.4 頭部はやや外反し口縫部に至る。 22.1) 口縫部は下方にやや肥厚し外輪 17.1) する面をなす。	内外面に刷毛調査のち擦れ 調査を施す。体部上位以上の 外面に擦れが付着する。	
* - 33	L-26-18	*		11.8 頭部は瓶輪から外反し口縫部に至る。粗い立体による刷毛調査を内外 18.0) 口縫部で下方に肥厚し外輪 15.9) する面をなす。	内外面に刷毛調査のち擦れ 調査を施す。体部中位前面に擦 れが付着する。	

161番号	選抜番号	器種	13種 法算 筋肉 直径 (mm)	形態・文様	手 法	備 考
7-34		壳	15.0 (19.5) 19.0 —	頭部は直線的に直上に立ち上がり 口縫部でやや外反する。	外面は口縫部で横で調整を施し、 体部に筋肉瘤が残る。口縫部 と体部上位の外側に瘤が付着す る。	
*-35	L26-18	*	— (20.2) 16.6 6.2	平坦な底部を持つ。	内外面に刷毛調整を施す。内面 には筋肉瘤が残る。体部外側 に瘤が付着する。	
*-36	L26-19	瓶	16.0 21.2 16.4 4.5	頭部から腹側に外反して口縫部は外側に曲面をなす。 平坦な底部に直径5 mmの穴 を空す。	内外面に刷毛調整を施す。体部 下位に瘤が残る。	
*-37	*	底部	— (7.4) — 5.8	平坦な底部を持つ。体部は内向き みに外上方に立ち上がる。	内外面に筋肉調整を施し、内面 に指跡の痕を残す。前面は瘤を 吸着する。	
*-38	L26-18	*	(31.5) — 6.0	平坦な底部を持つ。	内外面に刷毛調整のち密で調整 を施す。底部内面に筋肉瘤が残 る。	
*-39	L25-10	*	(12.7) — —	頭部は矮小で平面面をなす。体部 は底部矮小の内向きみに外上方に 立ち上がる。	内外面に刷毛調整を施し、内面 には筋肉瘤が残る。体部中位 前面に瘤や瘤の付着がみら れる。	
*-40	L25-9	瓶	— 46.7	「く」の字状に曲る瓶品。頭部外 面に粘土瘤を貼付する。	背面は体部で難い刷毛調整。口 縫部で難い刷毛調整を施す。筋 肉瘤に粘土瘤の組み目を施す。 筋肉瘤の粘土瘤(長さ17 mm) を右上縫合部で形成する。	
*-41	L26-12	壳	15.4 9.2 —	頭部から腹側に外反し口縫部に直 る。口縫部は下方にやや肥厚し ては直立する面をなす。	粗い表面による刷毛調整を四外 面に施す。体部内面に粘土瘤 を施す。	
*-42	L25-16	瓶	74.4 8.6 9.2 2.8	不規則な平面を持つ。底部矮小から 内向きみに外上方に立ち上がり、 体部から直線的に口縫部に向う。 口縫部は丸くおさめる。	外面に限界調整を施す。	
*-43	L25-13	底部	(33.7) — 8.0	平坦な底面を持つ。体部は内向き みに外上方に立ち上がる。	内外面に刷毛調整を施す。体部 下位外側に筋肉瘤や瘤の付着が みられる。	

第3節 古墳時代

1) 出土状況

古墳時代の祭祀に関わる遺物が集中して出土したのは埴輪（青灰色粘質土）の上部であり、標高4.50m付近である。古墳時代の土師器を中心としたものと、須恵器を中心としたものとに分けることができる。前者にはSF 20とSF 21が属し、後者にはSF 19が属する。

SF 19（第8図）

拡張調査区で検出した遺物群をSF 19とし、E 33-17, 23 グリッドを中心に出土した。須恵器の壺、坏、甌を中心とした祭祀と考えられる。遺物の出土状況は、個体として纏まっているものの、明確な祭祀跡を呈してはいない。南側で検出された祭祀の経辺に当るものと考えられる。標高は概ね4.60mであり、焼土や炭の集中部分は認められなかった。

SF 20（付図）

調査区の西部で出土した遺物で構成される。祭祀としての明確な土器の集中や焼土及び炭化物の集積はなかったが、L 25-3・8 グリッドで手捏ね土器、白玉、土製勾玉等の出土が見られ、一つの主体部がここに存在したものと考えられる。標高は4.00mであり、出土遺物としては、土師器の壺・壺・瓶・高坏・鉢、手捏ね土器の碗・鉢、土製勾玉、土玉、土製模造鏡、滑石製白玉である。

SF 20の南側では8基の焼土跡が検出されており、円形又は不整円形を呈する。規模は、直径30~80cmであり、焼土の厚さは中央部分でも10cmに達しない。検出面の標高は4.00mであり、土師器の破片を含有するものがある。

SF 21（第9図）

調査区の東部で出土した土師器を中心とする祭祀跡である。出土遺物の多くは細片であり、出土の形態はL 26-2・7 グリッドを中心とし北東方向軸に顯著である。主体部と考えられるL 26-2・7 グリッド周辺からは、炭化した木の実が多量に出土している。標高は3.70m前後であり、出土遺物は土師器の壺・壺・鉢・高坏、須恵器の坏・甌・甌、手捏ね土器の碗、滑石製の白玉等である。

SF 21の西側L 26-6 グリッドの標高4.00mからは、3cm大の小石を直径50cmの円形に敷き詰めた祭祀遺構や直径約50cmの円形を呈する焼土跡を、須恵器の甌等の遺物と共に検出する。（藤方）

2) 出土遺物

SF 19 (第10図1~22)

祭祀遺物 (1~4)

1~4は滑石製臼玉で径5mm, 厚3mm, 孔径2mm程のものである。

須恵器 (5~12)

5, 6は壺蓋で5の口径が14.0cm, 6は12.4cmを各々測る。共に天井部は欠損する。6は口縁がやや長く内反気味である。7, 8は壺身である。共にやや深いもので、8のたちあがり高はやや高く、受け部は水平にのび、口唇部が内傾して段を有する。9は高壺の脚部である。裾部は余り開かず、円孔の透しを有する。10は底で円孔部分は欠損する。体部にやや張りを持ち、口頭部は聞く、11は壺の口縁部破片である。口縁は外反気味で、端部が受口状を呈する。12は壺である。口径17.8cm, 腹径30.2cm, 器高29.0cmの大型のものである。底部は丸底で体部が強く張り球胴型を呈する。口頭部には凸帯を2条巡らし、その間に波状文を施す。胴部外側には格子状の叩き、内面はナデである。

土師器 (13~22)

13~16は土師器の高壺である。13は壺部で底部には段を有する。14~16は脚部で14は裾がやや立ち上がり、15, 16は平坦である。16の脚は短い柱状を呈する。17~21は壺である。17, 20は小型のもの、21は口径33.4cmを測る大型のものである。17は余り胴部に張りがみられず、20は頸部がくびれないものの胴部は丸味を持つ。22は瓶である。単孔式のもので、底部は丸味を持ち、体部は直線的に聞く。口縁は欠損する。

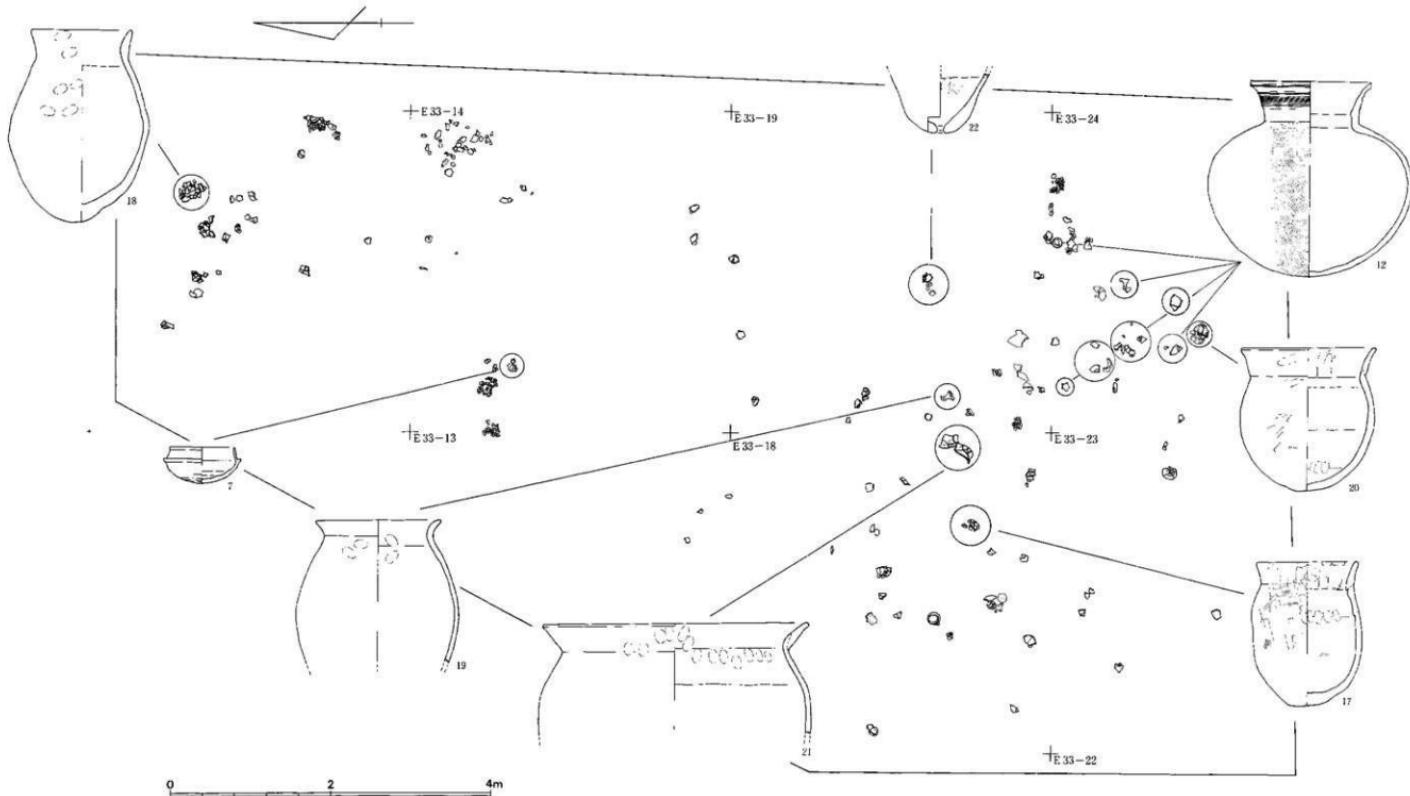
SF 20 (第11, 12図1~72)

祭祀遺物 (1~44)

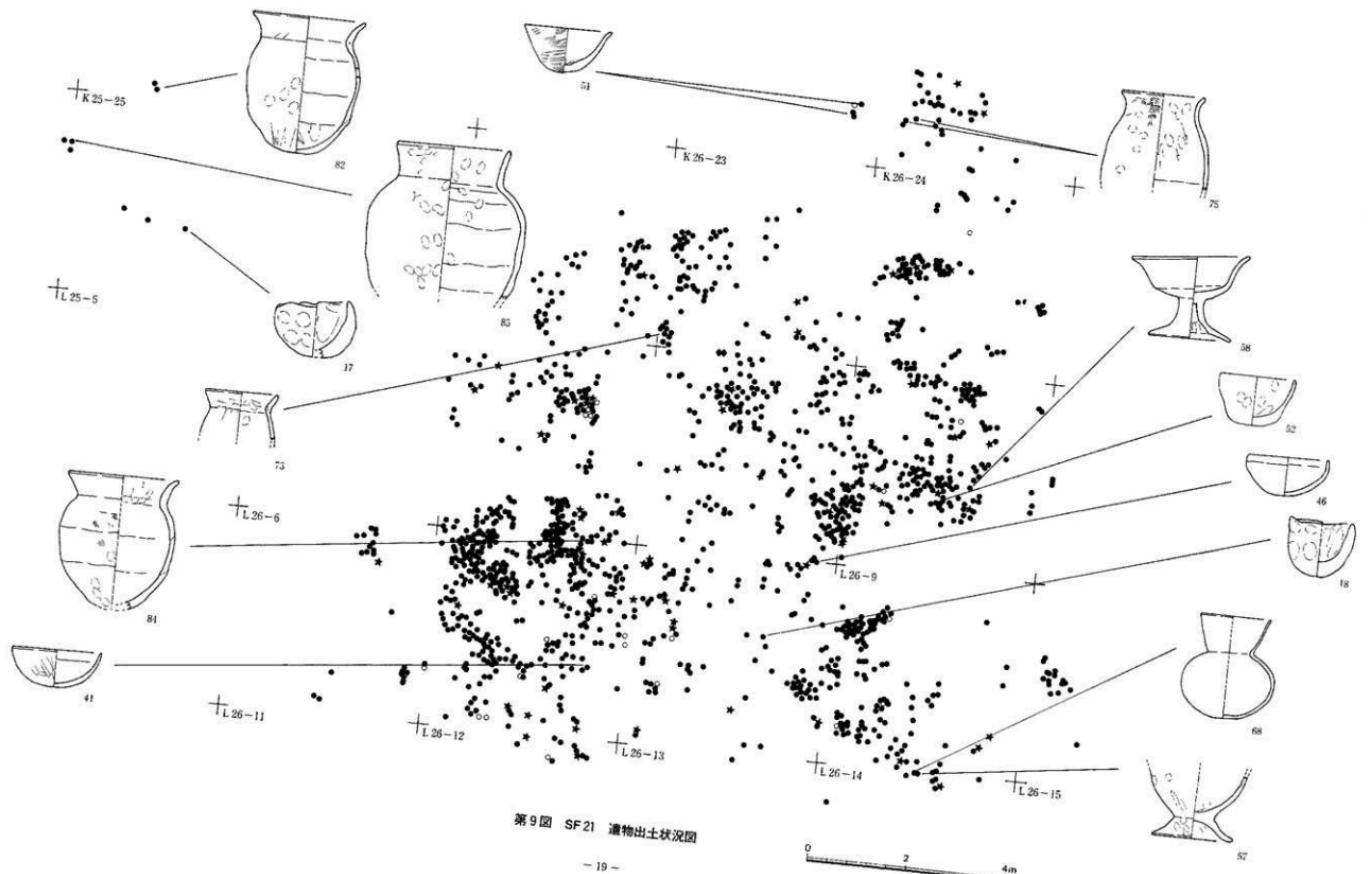
1~26は滑石製臼玉である。27~29は上製勾玉で28はやや大型の分類に入り、尾は欠損する。29は頭部が欠損するものの部分的に孔が残存している。30, 31は上製模造鏡である。共にやや楕円形を呈し、楕部分はやや高く孔を有する。32~37は上製土器である。その中で32は小型のものである。38~44は手捏ね土器である。38~40はやや小型のもので、38はI B類、39, 40はI C類に含まれる。41~44はやや大型のもので、41~43は平底である。41はII B類、42はII C類、43はIV B類に含まれる。44は壺型を呈する。

須恵器 (45~52)

45~48は壺蓋である。45は他のものに較べ天井部はやや低く、口縁は垂直に下りる。47, 48は棱線が短く凹線を有する。49~51は壺身である。共に底部は丸味を持ち、49は受部が水平にのび瓣部を丸く納め、たちあがりは内傾して外反気味に立ち上がっている。50, 51のたちあがりは欠損する。52は高壺で脚部は欠損する。体部に凹線を巡らせ、その上に5条1单



第8図 SF 19 遺物出土状況図



第9図 SF21 遺物出土状況図

位の波状文を施す。

土師器 (53~70)

53~56は碗である。53, 54は丸底気味のもので、55, 56は平底気味のものだが、55は深く、56は浅くやや小型のものである。57~59は脚付碗である。57の脚は短かく、58, 59は脚部が長くのびる。60, 61は高坏の脚部である。60の裾部は立ち上がり、61は平坦で脚はやや柱状を呈している。62~65は壺である。62は小型の胴部が強く張るもので、頸部がくびれ、口縁が直立する。65は口径14.8cmを測る大型のもので胴部が強く張り、口縁が内湾気味に直立する。66~69は甕である。69は胴部が張るもので、他はII類に含まれる。70は甕のつば部分と考えられる。

石器 (71, 72)

71, 72は叩き石と擦石で共に赤色顔料が付着する。

SF 21 (第13~16図1~90)

祭祀遺物 (1~22)

1~11は滑石製臼玉である。12は長さ2.1cm、最大径0.6cmの小型の土製品であるが、使用用目途等は不明である。形状はやや土製鍊に似るもの、孔は有しない。13, 14は土製玉でややいびつである。15は管状の上製鍊である。16~22は手捏ね土器である。16~19はやや小型のもので、20~22は体部に丸味を持ち、口縁部がややくびれる。22はやや大型のものである。

須恵器 (23~38)

23~26は坏蓋である。23, 24は天井部はやや低く、26は天井部に丸味を持ち、縁は凹線により作り出されている。27~33は坏身である。29の口径は12.0cm、30は11.6cmを測り、他のものは10cm強のものである。共に底部は丸底で回転ヘラケズリを行い、受け部を有し、たちあがりは外反気味に立ち上がる。34は高坏である。脚部は欠損する。坏体部に凹線を巡らし、6~7条1单位の波状文を施している。35, 36は甕である。35は体部及び口縁部にも波状文を施している。36は甕の口頭部と考えられ、頭部及び口縁に波状文を施している。37, 38は甕の口縁部破片である。37は口唇部外面に凹帶を巡らし、口頭部に凸帶1条を巡らせ、その下に波状文を施す。38は凸帶2条を巡らし、口縁はラッパ状に開く。

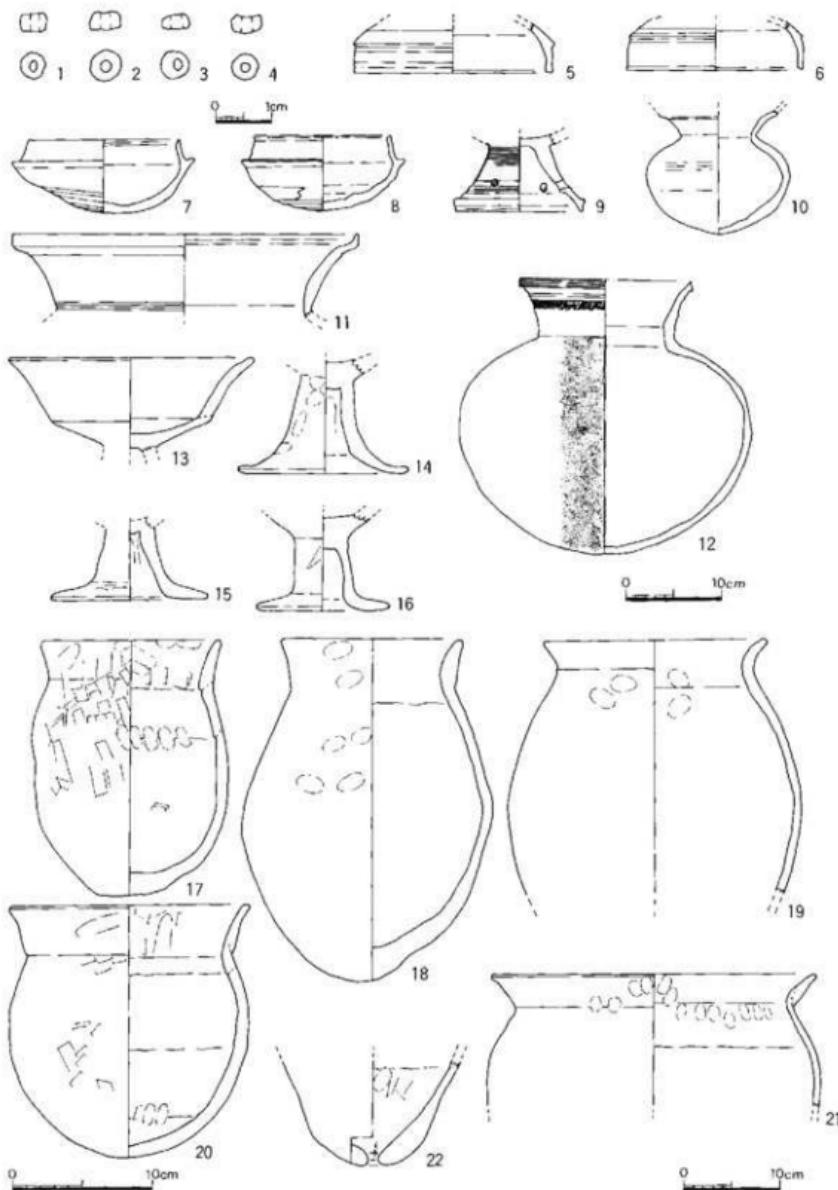
土師器 (39~88)

39~50は碗である。39~42はII A 1類に含まれ、底部が丸底で体部は丸みを持ち、口縁が直立気味に立ち上がるものである。43~46はII A 2類で口縁が僅かに内湾するものである。47は口縁端部が僅かに外反する。48, 49は底部がやや尖り気味である。50は口径16.0cmを測り、やや大型で底部は平底である。51~54は鉢である。51は外面にタタキ目がみられる。他のものは主に指頭による整形である。器形は51, 53は体部が聞くもので、52, 54はやや聞くものである。55~57は脚付碗である。55は脚部を欠損し、体部は直線的に聞く。56, 57は

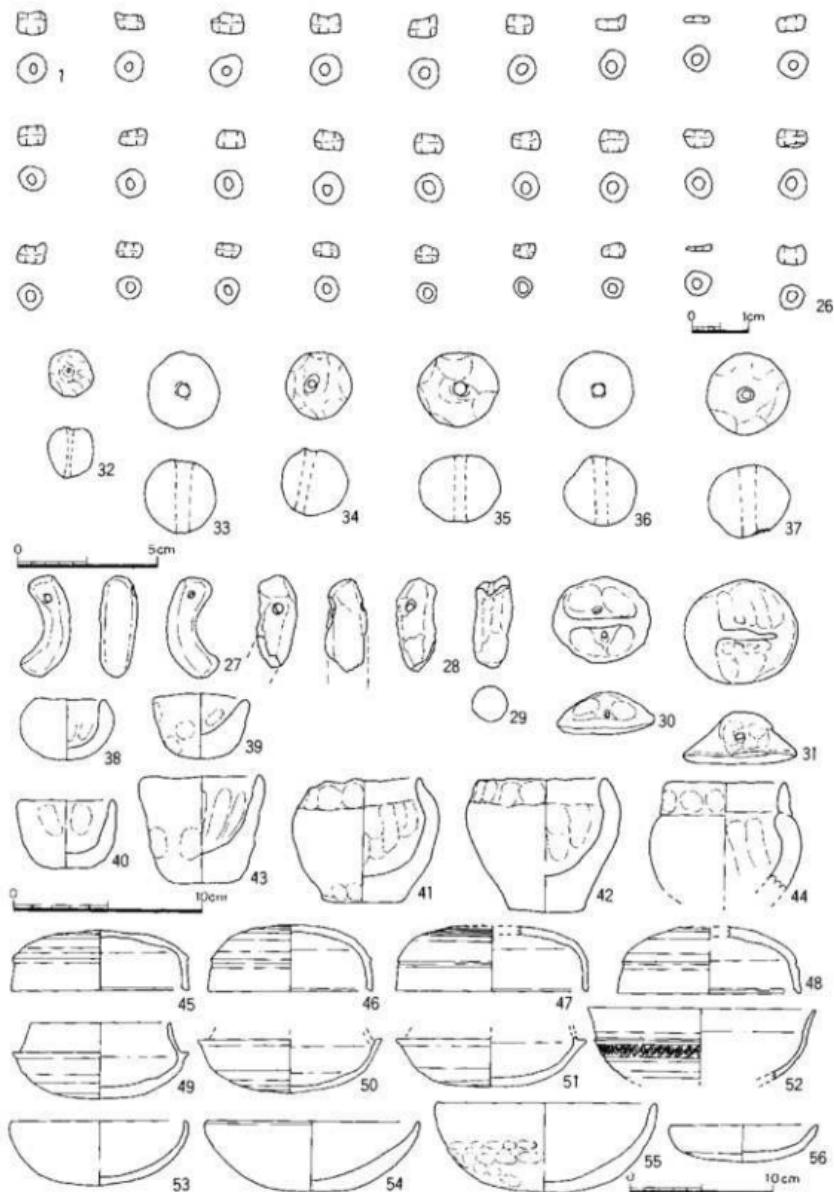
口縁部を欠損する。56 の脚部は短かく、57 は長く開くものである。58～66 は高坏である。58 は脚部据は立ち上がり、坏底部に段を有し、坏部と脚部の接合は正状の粘土塊による。59～63 は坏部で脚部は欠損する。59、60 は坏底部に段を有し、61～63 は接となるものである。65、66 は脚部である。共に裾は立ち上がるものの、65 の脚は短かい。67～71 は壺である。67 は器高 9.6 cm の小型のもので、体部が張り口縁がやや開き氣味に立ち上がる。69 は器高 26.6 cm を測るやや大型のもので、体部は張り、口縁が内湾氣味に直立する。70 は口縁が僅かに開いて直立する。71 はやや大型のもので口縁はやや長く外傾する。72～87 は壺である。72、73、80 は小型のものである。72、73 は体部に丸味を持たず、口縁が「く」字状に外傾する。74 は小さな平底の底部より体部は余り丸味を持たず、頭部もくびれずに口縁はやや長く緩やかに外傾する。外面の整形は平行タタキ→ハケ。内面整形はハケ→ナデである。75 は小型壺に含まれるもの、やや大きいもので、体部は丸味を持たず頭部もくびれずに口縁は僅かに外傾する。外面にハケ目がみられる。77～79 は体部がやや張るもので整形は主に指頭とナデである。80 は器高 14.8 cm の小型のもので体部はやや張る。82、83 は共に体部が強く張るもので、83 は頭部が強くくびれる。85 は口縁がやや長く直立するものである。88 は瓶で口縁部が欠損する。丸底の単孔式のもので、体部はやや丸味を持ち、直線的に僅かに開く。

石器 (89, 90)

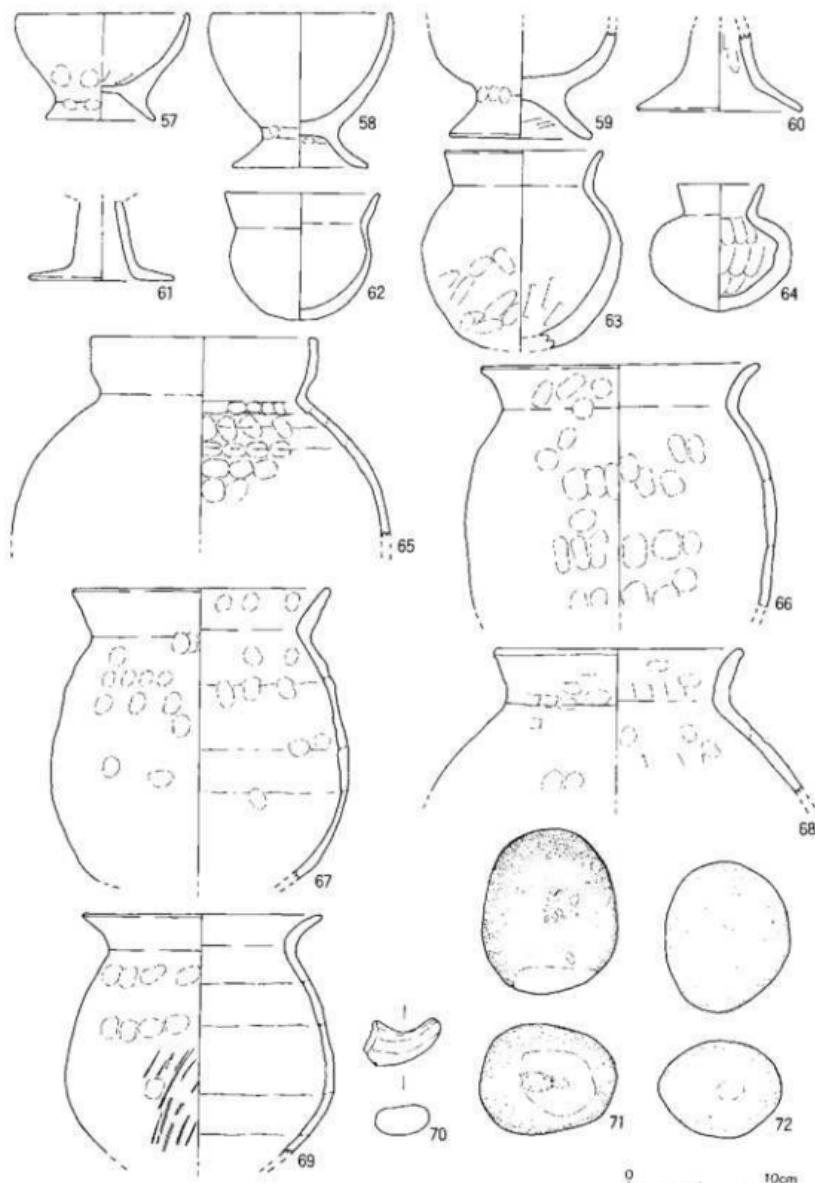
89 は叩き石で表裏面共に中央部に敲打痕がみられ、端部に赤色顔料が付着する。90 も赤色顔料が付着するものの、敲打痕は顯著に認められない。(前田)



第10図 SF 19 出土遺物実測図

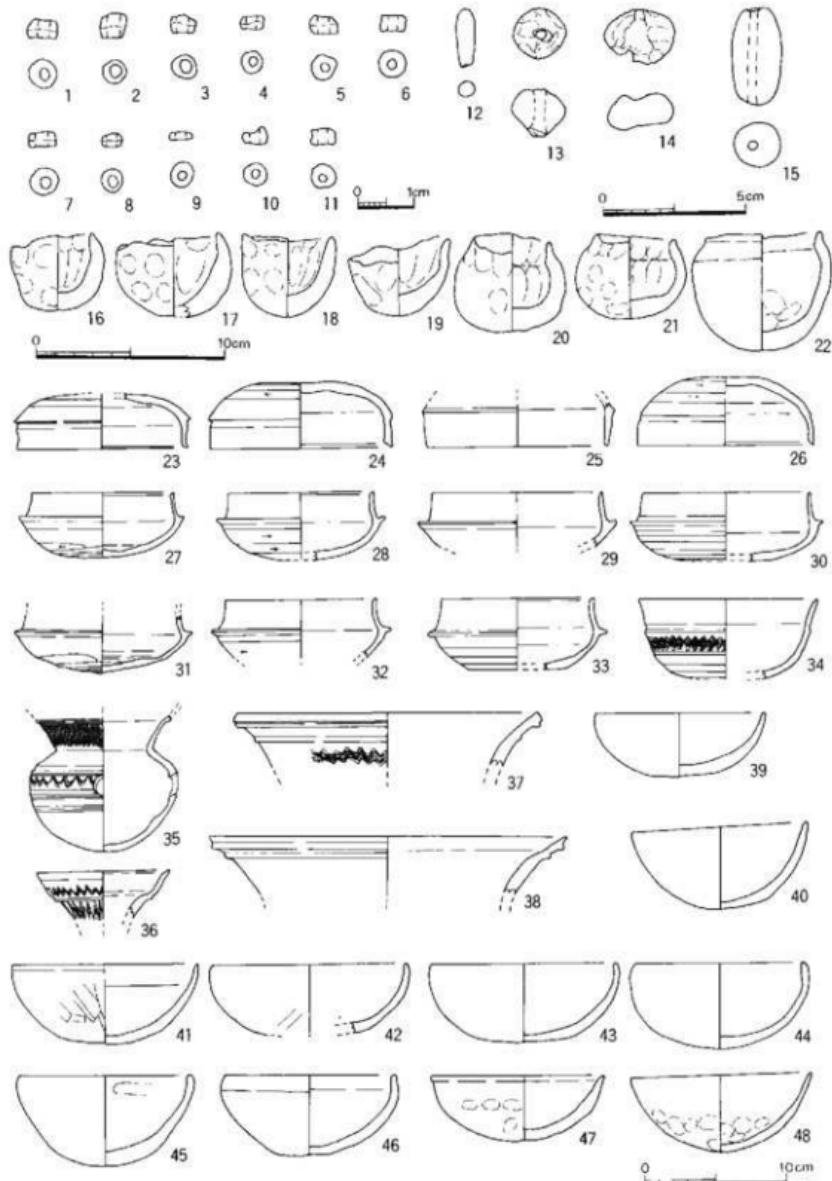


第11図 SF 20 出土遺物実測図(1)

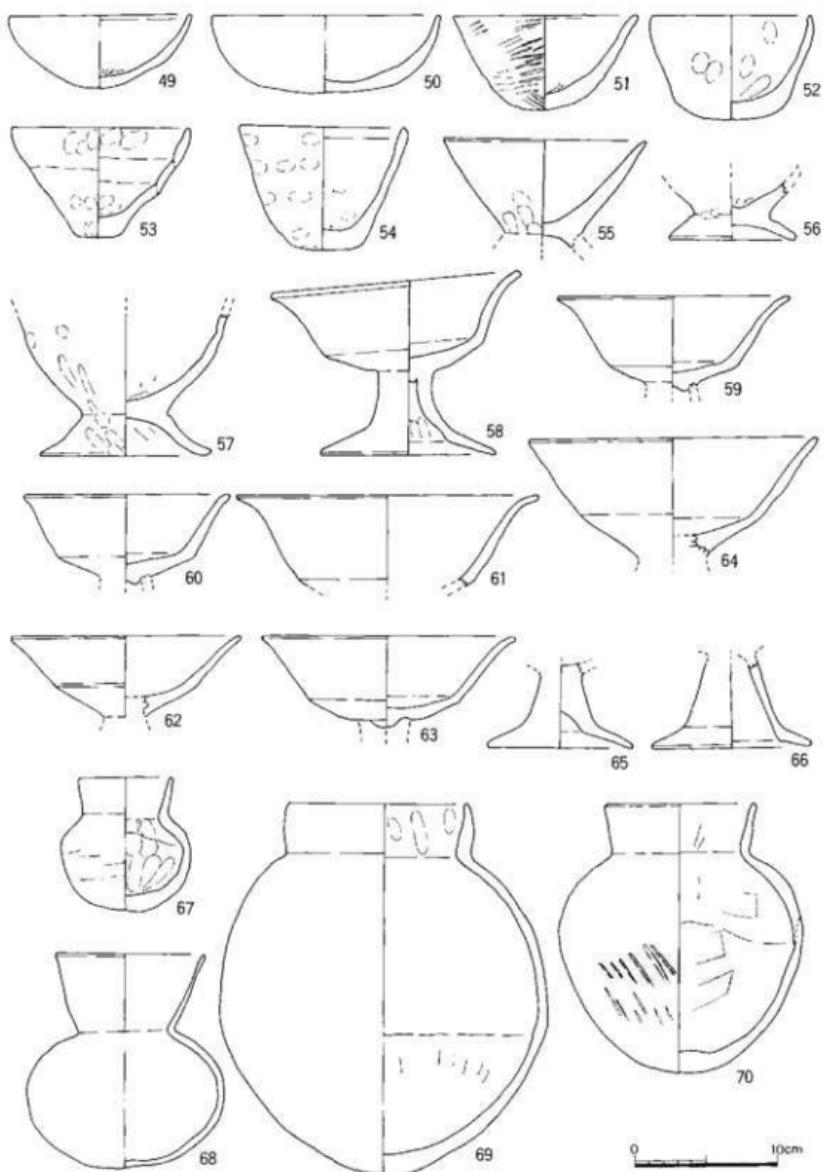


第12図 SF 20 出土遺物実測図(2)

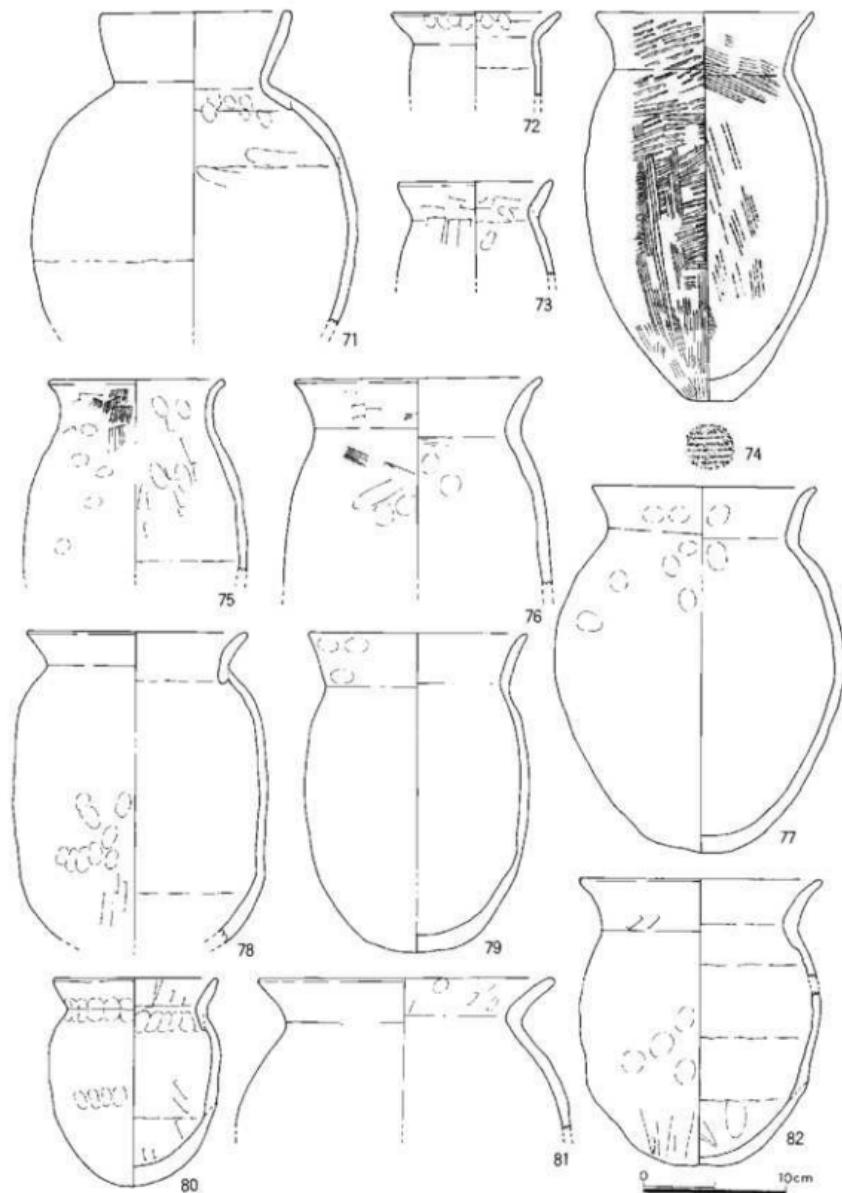
0 10cm



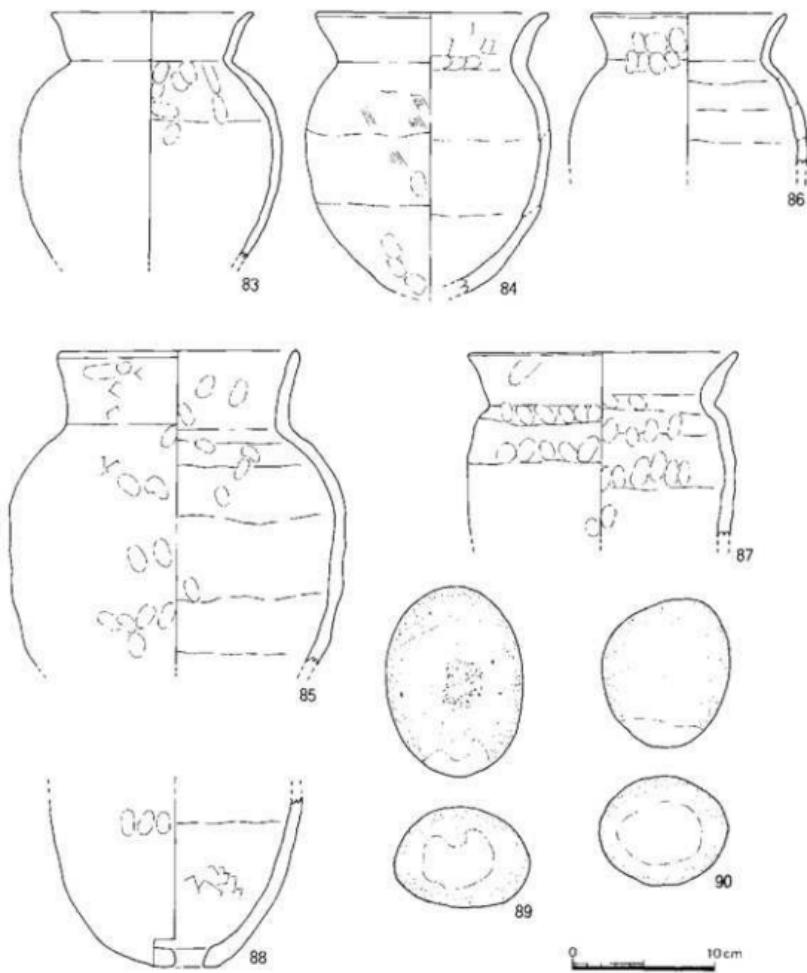
第13図 SF 21 出土遺物実測図(1)



第14図 SF 21 出土遺物実測図(2)



第15図 SF 21 出土遺物実測図(3)



第16図 SF 21 出土遺物実測図(4)

探査番号	遺構番号	器種	口径 高さ （cm）	断面 形状 測定 位置	形態・文様	手法	備考
10-5	SF 10	須恵器 环身	14.0 (3.5) 14.2 —	天井部分は大部分が欠損するもの の、底盤部は丸みを帯びて断面 三脚形を呈し、口縁部は直線的に なり、口唇部は内傾し、平底である。	天井部は3/4程度は回転ヘラケズリ、 底盤は倒転ナゲである。粘土は白色 色鉱物粒を微量含み砂質である。		
-6	*	*	12.4 (3.6) 12.3 —	天井部分は大部分が欠損する。底石 部はやや丸味を持つ。口縁部は厚 く内傾し、底盤は僅かに外反す る。口唇部は段を有し、内傾する。	天井部は3/4程度は回転ヘラケズリ。 底盤は回転ナゲである。粘土は 黄白色鉱物粒を微量含み砂質 である。		
-7	*	須恵器 环身	10.8 5.2 5.3 13.0	やや重苦な丸味のある底盤より、受 部は水平すらうのだが、たちあがりは なく、やや反る。縁部は直線的に 立ちあがり、口唇部は内傾して、 段を有する。	底盤は1/3程度回転ヘラケズリ、 底盤は回転ナゲである。粘土は2 ~3mmの黄白色鉱物粒を微量含 み、砂質である。		
-8	*	*	9.7 5.3 5.1 11.6	まろく丸味のある底盤より、受 部は水平すらうのだが、たちあがりは なく、やや反る。縁部は直線的に 立ちあがり、口唇部は内傾して、 段を有する。	底盤は1/3程度回転ヘラケズリ、 底盤は回転ナゲである。粘土は微 白鉱物粒を少量含み、砂質である。		
-9	*	須恵器 环身	16.3 9.0	圓筒のみ残存する。底盤は斜り場 かず、縁部に円孔のスカッシュを有す る。	縁部はナゲである。粘土は微白 色鉱物粒を多量に含む。		
-10	*	須恵器 环	18.7 10.2 —	丸底の底盤より、底盤はやや張り を持ち、底部がくびれ、口縁部は 聞く。体部の円孔部分は欠損する。	全体に弱い自然剥がれがあり、整 形部は円錐としない。体部に停 かし凹窓がみられが墻は不明 である。粘土は褐入物はみられ ず鐵河である。		
-11	*	須恵器 環	24.6 (5.9) —	口縁部のみ残存する。口縁部は外 反丸底に開き、底盤は直立し、受 部は執を呈する。	外面に四脚ナゲ。底盤は回転ナ ゲである。粘土は黄白色鉱物粒 を微量含み、燒成は済り良くない。		
-12	*	須恵器 壺	17.8 25.6 30.2 —	丸底の底盤より、体部は輪郭型を 呈し、最大径は輪郭中位に在する。 口縁部上位には2重凸沿を造らせる。 口には1重1本環状の後流弦を施す。 口縁部は特に抵抗なし、口の内 凹部を出す。	輪郭前面に横手執跡を残した 後、上位は同軸ナゲを施す。 内面はナゲである。粘土は砂粒 を微量含む。		
-13	*	上縁器 高环	17.2 16.7 —	輪部は欠損する。底盤は体部と底 盤の間に段を有し、口縁は斜反張 形で開く。	形態は内外面共にナゲである。 粘土はやや粗く、砂粒を少量含む	I 塚	
-14	*	*	18.6 — 12.1	底盤は欠損する。輪部は聞き立ち 上がる。	砂粒は指拌、ナゲである。粘土 はやや粗且て砂粒を少量含む。	A 塚	
-15	*	*	15.8 — 11.2	輪部は欠損する。輪部は平頭であ る。	砂粒はアドヘラケズリが埋か じみられる。粘土はやや粗く砂 粒を多量に含む。	C 塚	
-16	*	*	— (6.8) — 9.5	輪部は欠損する。輪部は柱状を呈 し、輪は半坦である。	砂粒はナゲで埋かねヘラケズリ がみられる。粘土は粗く砂粒を 少量含む。	*	
-17	*	上縁器 小型壺	12.6 18.0 — 3.8	小さな平底より、体部はやや丸味 を持ち、頂部はくびれす。口縁は 直立丸味である。	輪部は内外面共にヘラケズリ、 直脚、ナゲで輪部に粗ハケがみら れる。粘土はやや粗く砂粒を 少量含む。	I C I 塚	
-18	*	上縁器 壺	23.8 24.5 —	丸底の底盤より、底盤はやや丸味 を持ち、頂部はくびれす。口縁は 直立丸味にさしかかる。	形態は外面が指拌、ナゲ。内面 がナゲである。粘土は粗く、砂 粒を多量に含む。	B A I 塚	
-19	*	*	15.8 (18.0) —	底盤は欠損する。体部はやや丸味 を持ち、頂部は全くくびれず。口縁は 縦に縦にさしかかる。	形態は内外面共に帶狀、ナゲで ある。粘土はやや粗く、砂粒を 多量に含む。	*	

種別番号	番号番号	器種	口津 高さ (cm) 幅(横)	形態・文様	手 法	備考
10 - 20	SF 19	土器器 小型型	16.8 18.0 17.0 —	丸底の底盤より、体部は強く丸味を持ち、腹部はくびれす。口縁は瓶内に外傾する。	整部は内外面にヘラケズリ、粗面、ナマである。胎土はやや粗く砂粒を少量含む。	日本土加
— - 21	*	土器器 人形	33.4 (35.9) — —	胸部中位以下は欠損する。体部はやや丸味を持ち、腹部はくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	整部は内外面共に粗面、ナマである。胎土は粗く、人形の四肢を多量に含む。	
— - 22	*	土器器 瓶	— (7.5) —	底部のみ残存する。口部式で、底部は丸味を持ち、体部は直線的に外傾する。	整部は外面がナマ、内面がヘラケズリ、粗面、ナマである。胎土はやや粗く、砂粒を少度含む。	
11 - 30	SF 20	土製模造品	全長 4.6 全輪 3.1 全厚 2.2	筒円形を呈し、口は小さな孔を有する。	整部は表面が指面、ナマ、表面がナマである。胎土はやや粗く、砂粒を少度含む。	I D 加
— - 31	*	*	全長 5.6 全幅 9.0 全厚 2.8	やや筒円形を呈し、やや高い33.4 9.0 2.8 孔を有する。	整部は表面が指面、ナマ、表面がナマである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	*
— - 38	*	手捏ね土器	3.7 3.2 — —	丸底の底盤より、鋸溝は丸味を持ち、口縁は丸味である。	整部は外面がナマ、内面が指面、ナマである。胎土は粗で、砂粒を多量に含む。	I B 加
— - 39	*	*	5.0 3.5 — —	半筒気味の底盤より、体部は丸味を持たず、外輪気味に立ち上がる。	整部はやや粗く、内外表面に指面がある。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I C 加
— - 40	*	*	5.0 3.6 — —	半筒気味の底盤より、体部は僅かに丸味を持ち、外輪気味に圓く。	整部はやや粗く、内外表面に指面、ナマである。胎土はきめ細かいもの。砂粒を多量に含む。	*
— - 41	*	*	5.8 6.7 4.4	半筒の底盤より、体部は丸味を持ち、口縁端部がくびれる。	整部は外面が指面、ナマ、内面が指面、ナマである。胎土は粗く、砂粒を多く含む。	I D 加
— - 42	*	*	6.6 7.1 — 4.0	半筒の底盤より、体部は丸味を持ち、口縁端部が僅かにくびれる。	整部は外面が指面、ナマ、内面が指面、ナマである。胎土は粗で、砂粒を多く含む。	II C 加
— - 43	*	*	6.2 5.8 — 3.0	半筒の底盤より、体部は丸味を持たず、外輪気味に立てる。	整部は外面が指面、ナマ、内面が指面、ナマである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	N B 加
— - 44	*	*	6.2 (5.8) — —	底盤は欠損する。体部は丸味を持ち、腹部はくびれす。口縁は直立する。	整部は外面が指面、ナマ、内面が指面、ナマである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
— - 45	*	单足器 环器	12.6 4.3 12.4 —	天井部はやや丸味を持ち、縁は剥がれ、口縁部はほぼ直面に下り、口縁部は僅かに内傾をなし内側する。	天井部は2/3程度が削れ、ヘラケズリ、内面直面はナマ。他は圓軌ナマである。胎土は黒褐色系物質を微量含む。	
— - 46	*	*	11.6 4.7 11.4 —	天井部は丸味を持ち、縁は剥がれ、口縁部は直面気味に下り、口縁部は僅かに内傾をなし内側する。	天井部は2/3程度が削れ、ヘラケズリ、他は圓軌ナマである。胎土は白色系物質を微量含む。	
— - 47	*	*	13.6 4.6 12.4 —	天井部は丸味を持ち、縁は剥がれ、下に凹窓が透る。口縁部は僅かに外輪気味に下り、口縁部は段状に内傾する。	天井部1/2程は剥離ヘラケズリ、天井部は内面にはカキ目が伴かに残り、他は圓軌ナマである。胎土は白色系物質を微量含む。	
— - 48	*	*	12.8 4.7 12.2 —	天井部はやや丸味を持ち、縁は剥がれ、下に凹窓が透る。口縁部は僅かに外輪気味に下り、口縁部は段状に内傾する。	天井部1/2程は剥離ヘラケズリ、天井部は内面にはカキ目が伴かに残り、他は圓軌ナマである。胎土は白色系物質を微量含む。	

標本番号	遺傳子号	器種	TTR 基部 法量 (cm) 延伸 度	形態・文様	手 法	備 考
H-49	SF-39	頭部器 輪身	10.0 3.4 受部深 12.6 たらあがり度 2.1	底部は丸味を持ち、受部は平下で 輪部は丸い。たらあがりは内輪し 外気味に立ちあがる。口輪部は 丸くおさめる。	底部は2/3程は回転ヘラケズリ。 他の回転ナガである。粘土は白 色動物粘を微量含む。	
*-50	*	*	— 44.2 受部深 13.0 たらあがり度 —	— 底部は丸味を持たず、受部は 水平にのび、輪部は丸味を持つ。 たらあがりは丸屈する。	底部は1/2程は回転ヘラケズリ。 他の回転ナガである。粘土は白 色動物粘を微量含む。	
*-51	*	*	— 13.6 受部深 13.4 たらあがり度 —	— 底部は金り丸味を持たず、受部は 水平にのび、輪部は丸味を持つ。 たらあがりは丸屈する。	底部は1/2程は回転ヘラケズリ。 他の回転ナガである。粘土は白 色動物粘を微量含む。	
*-52	*	頭部器 輪身	16.0 15.0 — —	輪部は丸屈する。底部部は丸味を持 ち、輪部に凹窓を残し、その上に1条の筋状文を施す。 — — 輪部は外気味に立ち上がり11 筋部は丸く。	底部部は回転ヘラケズリ。他の 回転ナガである。船上は精良で 筋部を微量含む。	
*-53	*	上部器 輪	12.2 4.6 — 2.0	丸底の底部より、体部は丸味を持 ち、口輪は直ぐ気味に立ち上がる。	整形は内外表面にナゲである。 船上はやや粗く、筋部を多量に 含む。	I A 上輪
*-54	*	*	15.0 5.0 — 4.0	丸底の底部より、体部は丸味を持 ち、口輪は直ぐに丸く立ち上がる。	整形は内外表面にナゲで、僅かに 指紋がみられる。船上は精良で ある。	I B 上輪
*-55	*	*	15.2 8.4 — —	平底気味の底部より、体部は丸味を持 ち、口輪は直ぐに丸く立ち上がる。	整形は外曲面にナゲ。ナゲ、内面 がナゲである。船上はやや精良で、 筋部を微量含む。	II
*-56	*	*	10.4 2.8 — —	平底気味の底部で、体部は丸味。 口輪は外気味に立ち上がる。	整形は内外表面にナゲである。 船上は粗く、白色動物粘。筋部 を多量に含む。	V 輪
12-57	*	上部器 輪付輪	12.2 7.4 — 7.7	輪部は直ぐく「八」字形に開き、輪 部基部部は金り丸味を持たず、口 輪部はやや内気味である。	整形は内外表面にナゲで、外面 輪部結合部が凹窓、輪部内部に 僅かにヘラケズリがみられる。 船上はやや粗く、筋部を微量含 む。	I A 輪
*-58	*	*	12.8 31.0 — — 9.8	輪部は直ぐく「八」字形に開き、輪 部は丸味を持つ。口輪部は丸屈す る。	整形は内外表面にナゲで、僅かに 指紋がみられる。船上は粗く、大 粒の筋部を多量に含む。	II
*-59	*	*	— 17.6 — — 9.8	輪部は丸味を持つ。輪部基部は立ち上 がる。	整形は輪部結合部が凹窓で他は ナゲである。船上は粗く、大粒 の筋部を多量に含む。	A 輪
*-60	*	上部器 輪身	— 15.7 — — 11.4	輪部は丸味を持つ。輪部基部は立ち上 がる。	整形は外曲面はナゲ、輪部内面は ヘラケズリ、ナゲである。船上 は粗く、筋部を多量に含む。	*
*-61	*	*	— — 26.4	輪部は丸屈する。輪部基部は直ぐに 開き、輪部は丸味を呈する。	整形はナゲである。船上はやや 粗く、筋部を少量含む。	C 輪
*-62	*	上部器 輪	10.8 8.9 10.1 —	丸底の底部より、体部は丸味を持 ち、底部は全くびびれず、口輪は 輪部に外屈する。	整形は内外表面にナゲである。 船上はやや精良で、筋部を微量 含む。	I 輪
*-63	*	*	11.0 13.9 14.0 —	丸底の底部より、体部は丸味を持 ち、底部はややくびれ、口輪は輪 部に外屈する。	整形は外曲面が凹窓、ナゲ、内面 がヘラケズリである。船上はや や粗く、筋部を少量含む。	*

標本番号	遺構番号	岩種	法基 法基 (cm)	11号 器高 側邊 直径 (cm)	形態・文部	手法	備考
12-64	SF-30	土器器 底	-	6.0 9.0 - -	丸底の底部より、底部が強く丸味を持ち、底部がくびれ、口縁は丸味を有する。	整形は外面がナデ、内面がザブザブである。粘土は粗く、大陸の砂粒を多量に含む。	V類
*-65	*	*	-	14.8 (14.0) - -	丸底の底部より、底部は強く丸味を持ち、底部をくびれ、口縁は内側に凹する。	整形は内面に指痕が多くみられ、底はナゲである。粘土は粗く、大陸の砂粒を多量に含む。	質地
*-66	*	土器器 底	-	19.4 (17.2) 21.8 -	底部下部は欠損する。底部は丸味を持たず、底部は体かにくびれ、口縁は丸味を有する。	整形は内外表面に指痕、ナゲである。粘土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II B Ⅱ類
*-67	*	*	-	18.0 (20.7) - -	底部下部は欠損する。底部はやや丸味を持ち、底部はくびれ、口縁は外側に凹する。	整形は内外表面に指痕、ナゲである。粘土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II B Ⅲ類
*-68	*	*	-	17.0 (10.5) - -	底部中位以下は欠損する。底部はやや丸味を持ち、底部は丸味を有する。	整形は内外表面にヘラケズリ、指痕、ナゲである。粘土はやや粗且て、白色風化物、砂粒を少量含む。	III類
*-69	*	*	-	16.8 (17.4) - -	底部下部は欠損する。底部は丸味を持ち、底部はくびれ、口縁は外側に凹する。	整形は外延側部にヘラナゲか細かいハケ状の整形痕がみられ、底は指痕、ナゲである。粘土は粗く、白色風化物、砂粒を多量に含む。	III B Ⅲ類
*-70	*	土器器 底	-	- - - -	つぼの部分のみ残存する。上方は直曲する。	粘土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	
*-71	*	卵石	全長 全幅 全厚 重量	11.8 9.5 7.2 3250g	自然の凹溝で卵形並中央部及び両端部に崩れ痕を有する。側面には差分的に凸起及び凹窓が認められる。また、底部には赤色顔料の付着がみられる。		
*-72	*	卵石	全長 全幅 全厚 重量	10.7 8.8 6.9 895g	一端には赤色顔料が薄かに付着する。		
13-12	SF-21	土製不明品	全長 全幅 重量	2.1 0.6 7g ない。	長さ2.1cm、幅6mmの小さな土塊状を呈するが、孔は穿かれていない。	粘土は粘食である。	
*-14	*	土製土	全長 全幅 重量	2.0 2.5 4.7g	いびつな形を呈し、孔は穿れていない。	粘土は粘食である。	
*-16	*	手捏ね土器	全長 全幅 重量	4.2 4.0 -	やや丸底で底部は強めに丸味を持ち、口縁は丸味を有する。	整形は外面が滑ら、ナゲ、内面が指ナゲ、指痕、ナゲである。粘土はやや粗く、砂粒を少量含む。	LB類
*-17	*	*	全長 全幅 重量	9.5 4.1 -	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は内側丸味である。	整形は内外表面に指痕、ナゲである。粘土は粗く、大陸の砂粒を多量に含む。	LC類
*-18	*	*	全長 全幅 重量	4.8 4.1 -	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は直立する。	整形は外面が滑ら、ナゲ、内面が指ナゲ、指痕、ナゲである。粘土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	*
*-19	*	*	全長 全幅 重量	5.2 5.1 -	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は圓形丸味になつた。	整形は外面が滑ら、ナゲ、内面が指ナゲ、指痕、ナゲである。粘土はやや粗く、砂粒を少量含む。	*

標本番号	遺構番号	器種	目地 器高 測定 実寸 (cm)	形態・文様	下法	備考
13-20	SF.21	手懸ね上器	4.0 5.1 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部がやくびれる。	形態は外面が圓錐、ナゲ、内面が鋸ナゲ、凸面である。粘土はやや粗く、砂粒を少量含む。	直節
*-21	*	*	4.0 4.1 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部がやくびれる。	形態は外面が圓錐、ナゲ、内面が鋸ナゲ、凸面である。粘土は粗直で砂粒を微量含む。	*
*-22	*	*	6.0 6.2 7.4 —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部がやくびれて、近縁部を厚くする。	形態は内外面共にナゲ、内面に鋸歯が複数にみられる。粘土は粗く、砂粒を多量に含む。	直節
*-23	*	直底器 环身	12.2 13.9 12.4 —	天井部は低く、脚はするどく外方向にのび、口縁は内凹気味に下り、縁部は外反する。口縁部は段状に内縮する。	天井部は1/2回転へラケズリ、底は回転ナゲである。粘土は白色無物粒を微量含む。	
*-24	*	*	12.8 14.6 13.0 —	天井部はやや低く、やや丸味を持ち、腰はややすらとく、口縁部は2段折して下り、口内面は凹線を走らし、内輪する。	天井部は1/2回転へラケズリ、底は回転ナゲである。粘土は白色無物粒を微量含む。	
*-25	*	*	12.8 13.1 13.6 —	天井部は次折する、腰は余り尖らず、口縁部は2段折である。	全面回転ナゲである。粘土は白色無物粒を微量含み、底は丸。	
*-26	*	*	12.2 14.8 — —	天井部は高く丸味を持ち、腰は4段によう出し、口縁部は腰から内凹気味に下り、口縁部は内縮する。	天井部2/3段は回転へラケズリ、底は回転ナゲである。粘土は白色無物粒を微量含む。	
*-27	*	直底器 环身	10.2 4.6 1.8 11.8 —	底部は丸味を持ち、やや深く、空腹は僅に上方にのび、縁部は丸味を持つ。たちあがりは外反気味に内縮する。口縁部は段状に内縮する。	底部1/3段は回転へラケズリ、底は回転ナゲである。粘土は人骨の白色無物粒を微量含む。	
*-28	*	*	10.4 11.7 1.9 12.0 —	底部は丸味を持ち深く、空部は上方にのび、縁部は丸味を持つ。たちあがりは外反気味に内縮する。口縁部は内縮する。	底部2/4段は回転へラケズリ、底は回転ナゲである。粘土は白色無物粒を微量含む。	
*-29	*	*	12.0 13.8 2.1 14.0 —	底部は丸味を欠する。空部はやや上方に立ち、縁部は内縮を持ち、立ちあがりはやや内傾。口縁部は丸くおさまる。	全面回転ナゲである。粘土は幾白色無物粒を微量含む。	
*-30	*	*	11.6 4.8 2.0 13.0 —	底部は丸味を持ち、空部は水平に弱力的にのび、縁部は僅かに丸味を持つ。たちあがりは僅かに内縮4段に立ち上がり、口縁部は丸味を持つ。	底部2/3段は回転へラケズリ、底は回転ナゲである。粘土は幾白色無物粒を多量に含む。	
*-31	*	*	— (4.3) 1.2 12.7 —	底部は丸味を欠する。空部は長く斜に水半にのび、縁部は丸味を持つ。たちあがりは大部分が失却する。	底部は回転へラケズリ、底は回転ナゲである。粘土は幾白色無物粒を多量に含む。	
*-32	*	*	10.8 (4.2) 2.1 12.8 —	底部は丸味を欠する。空部は水平に丸味を持つ。たちあがりは外反気味にやや内縮する。	底部は回転へラケズリ、底は回転ナゲである。粘土は幾白色無物粒を少量含む。	
*-33	*	*	10.8 2.3 12.6 —	底部は丸味を欠する。空部はやや長い外方にのび、縁部は丸味を持つ。口縁部は僅かにやや内縮する。	底部2/5段は回転へラケズリ、底部内面はナゲ、底は回転ナゲである。粘土は白色無物粒を少量含む。	
*-34	*	直底器 高环	— — — —	縁部は次折する。底部にやや丸味を持ち、体部に凹線を走し、6-7条1單位の形状を有す。口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁部はやや丸く納める。	環状然は回転へラケズリ、底は回転ナゲである。粘土は精良である。	底

標本番号	通標番号	器種	口唇 器皿 構造 記載 (cm)	形態・文様	手 法	備考
13-35	SF 21	埴毛器 瓶	— (9.6) 10.6 —	底部は丸底で体部上部に1条の腹 凸筋をもつ。周囲に1条又4本半径 の周波状文及び径1.5cmの孔を穿 つ。口縁は1条13-14半径の 腹波状文を施し、その上に凸筋をも つける。口唇部等は欠損する。	底部外面は手持ちハケスリ、 内部内面は磨きナメ。瓶は同様ナ メである。瓶口は白色無物質を 少量含み、また自然触が掛か る。	
*-36	*	*	9.2 (3.4) — —	口唇部のみ残存する。口縁部には 周波状文を施し、周波状2角形の内面 が窓。口経部には1条又4本半径の 腹波状文を施す。口縫は外輪し、 口縫部は受け口状を呈する。	豐形は倒転ナメである。瓶口は 白色無物質を残す。内面には 自然触がかかる。	
*-37	*	埴毛器 瓶	21.0 (3.9) 外底部上位には星形開口部を巡らし、 その下に1条又4本半径の周波状文を 施す。口縫はクッパ状に開く。	口縫部のみの破片である。口唇部 は外底部上位には星形開口部を巡らし、 その下に1条又4本半径の周波状文を 施す。口縫はクッパ状に開く。	豐形は倒転ナメである。瓶口は 白色無物質を残す。	
*-38	*	*	25.2 (4.1) — —	口縫部のみ残存する。口縫部外側 の内面に凸筋を巡らす。口縫は クッパ状に開く。	豐形は倒転ナメである。瓶口は 白色無物質を少量含む。	
*-39	*	埴毛器 瓶	11.8 4.5 — —	丸底の底部より、体部は丸底を持 ち、口縫は横吹きに立ち上がる。	豐形は内外表面にナメである。 瓶口はやや粗く、砂粒を多量含む。	II A 1 加
*-40	*	*	12.2 0.2 —	丸底の底部より、体部は丸底を持 ち、口縫はやや開き口縫に立ち上 ぐやや深めの縫である。	豐形は内外表面にナメである。 瓶口はやや粗く、大粒の砂粒、 破片跡を多量に含む。	
*-41	*	*	13.2 5.6 — —	丸底の底部より、体部はやや深く 丸底を持ち、口縫は直立気味であ る。	豐形は外面に傳かにハテラズナ がみられ、瓶口はナメである。瓶 口はやや横食で砂粒を少量含む。	II A 1 加
*-42	*	*	13.8 5.0 — —	丸底の底部より、体部は丸底を持 ち、口縫は直立丸底に立ち上がる。	豐形は内外表面に落葉が表しく 不規則である。瓶口は粗く、砂粒 を多量に含む。	*
*-43	*	*	13.0 6.6 — —	丸底の底部より、体部は丸底を持 ち、口縫はやや内凹気味に立ち上 がる。	豐形は内外表面にナメである。 瓶口はやや粗く、砂粒を少量含 む。	II A 2 加
*-44	*	*	12.0 6.1 — —	丸底の底部より、体部は丸底を持 ち、口縫は僅かに内凹する。	豐形は内外表面にナメである。 瓶口は粗く、破片跡、砂粒を多 量に含む。	*
*-45	*	*	12.2 6.5 — —	丸底の底部より、体部はやや深め 丸底を持ち、口縫は僅かに内凹 する。	豐形は内外表面にナメである。 瓶口は粗く、砂粒を多量に含む。	*
*-46	*	*	11.8 5.8 — —	丸底の底部より、体部はやや丸底 を持ち、口縫は僅かに内凹氣味に 立ち上がる。	豐形は内外表面にナメである。 瓶口は粗く、砂粒を多量に含む。	II A 2 加
*-47	*	*	12.2 4.6 — —	丸底の底部より、体部は丸底を持 ち、口縫部が僅かに外反する。	豐形は外面に指痕が僅かにみら れ。瓶口はナメである。瓶口はや や粗く、砂粒を微量含む。	II A 3 加
*-48	*	*	12.8 5.5 — —	底部がやや突起気味で体部に近く 体部はやや丸底を持ち、口縫は開 く。	豐形は内外表面に肌面、ナメで ある。瓶口は精良で、砂粒を少 量含む。内面は白色滑沢、外側 は黑色厚膜を施す。片に2/3程 残存する。	
II 49	*	*	12.8 5.1 — —	やや突起気味の丸底より、底盤は やや丸底を持ち、口縫はやや開き 気味に立ち上がる。	豐形は内外表面にナメである。 瓶口はやや精良で砂粒を微量含 む。	II A 1 加

測定番号	遺構番号	器種	目録 登場 回数 (ton)	形態・文様	手 法	備 考
14-66	SF21	土器 高脚	— 56.1 — 11.0	底部は欠損する。側部はやや平坦で僅かに立ち上がる。	側面はナガである。底土はやや 砂質で、砂粒を微量含む。	B類
*-67	*	土器 小型壺	6.8 2.6 9.2 —	丸底の底部より、側部は膨みを持ち、口縁は直立する。	側面は外表面がヘラケズリ、ナガ 内面が指面、指ナダである。底土は やや粘土だが、人糞の砂粒を少量含む。	V類
*-68	*	土器 壺	10.4 15.4 14.0 —	丸底の底部より、側部は膨みを持ち、口縁は長く開き気味に立ち上がる。	側面は内外面共に丁寧なナガがある。底土は粘土で砂粒を微量含む。	Ⅲ類
*-69	*	*	12.5 26.6 23.0 —	丸底の底部より、側部は薄く丸味を持ち、沿縁がくびれ、口縁は直立して僅かに立ち上がり、口縁端部がやや内凹する。	側面は外表面がヘラケズリ、ナガで後方にヘラケズリ、指面がくび られる。底土はやや粘土で砂粒を少量含む。	Ⅳ類
*-70	*	*	10.2 19.2 17.1 —	丸底の底部より、側部は丸味を持ち、沿縁がやや内凹する。側部がくび れ、口縁が直立する。	側面は外表面がヘラケズリ、側面 は薄いナガ、内面がヘラケズリ、ナ ガである。底土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	Ⅴ類
15-71	*	*	13.3 (22.0) 23.1 —	側面下部は欠損する。側部は丸味を作り、沿縁がくびれ、口縁がや や外傾して立ち上がる。	側面は外表面やや膨らむナガ、内 面が指面、指ナダ。ナガである。 底土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	*
*-72	*	土器 小型壺	11.8 (5.9) 9.3 —	側部中盤以下は欠損する。側部は丸味を持たず、沿縁はくびれず、口 縁は外傾する。	側面は口縁内外面を指面、側 面はナガである。底土はやや粗く、 白色遮光物。砂粒を少量含む。	
*-73	*	*	10.8 (6.8) —	側面中盤以下は欠損する。側部は丸味を持たず、沿縁はくびれず、 口縁は外傾する。	側面は外表面はヘラケズリ、ナガ、 内面が指面、ハラケズリ、ナガである。 底土はやや粘土で砂粒を少量含む。	
*-74	*	土器 壺	15.0 27.6 17.0 3.4	小さな平底から側部は僅かに丸味を持ち、沿縁は全くくびれず、口 縁は直立に外傾する。	側面は外表面が平行タキの後に ハラケで、口縁はタキのみてある。 内面はハラケナダである。底 土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
*-75	*	土器 小型壺	12.2 (13.6) 16.0 —	側面下部以下は欠損する。側部は丸味を持たず、沿縁はくびれず、 口縁は僅かに外傾する。	側面は外表面がハラケズリ、ヘラケズリ、指面、ナダである。内面はヘラ ケズリ、ナダである。底土はやや粗く、砂 粒を少量含む。	I A 1類
*-76	*	土器 壺	17.4 (14.2) —	側面中盤以下は欠損する。側部は丸味を持たず、沿縁はくびれず、 口縁は直立に外傾する。	側面は上部でナダで、ヘラケズリ、 ハラケ、指面が僅かにみられる。 底土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I C 1類
*-77	*	*	15.4 26.1 20.4 —	丸底の底部より、側部は丸味を持 ち、沿縁は全くくびれず、口縁は外 傾する。	側面は外表面がナダ。指面で僅か にヘラケズリがみられる。内面 はナダである。底土はやや粗く、 砂粒を少量含む。	II A 1類
*-78	*	*	15.5 (22.1) 18.0 —	丸底の底部より、側部はややくびれ、口縁は外 傾する。	側面は外表面がナダ。指面で僅か にヘラケズリがみられる。内面 はナダである。底土はやや粗く、 砂粒を少量含む。	II D 2類
*-79	*	*	15.0 22.8 15.8 —	丸底の底部より、側部は僅かに丸 味を持ち、沿縁はくびれず口縁は 直立気味に僅かに外傾する。	側面はナダで側面が指面がみら れる。底土はナダ。内面側部が 指面。側面はヘラケズリ、ナダである。 底土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II C 1類
*-80	*	土器 小型壺	11.6 14.8 12.3 —	丸底の底部より、側部は全く丸味 を持たず、沿縁は僅かにくびれ、 口縁はやや外傾する。	側面は外表面がナダ。側部に側面が みられ、底土はナダ。内面側部が 指面。側面はヘラケズリ、ナダである。 底土はやや粗く、砂粒を少量含む。	*

種別番号	遺構番号	器種	法基 (cm)	山根 器内 測定 部位	形態・文様	手 法	備考
14-81	SK-21	上耕器 頭	20.6 (10.6) — —	胴部中段以下は欠損する。胴部は丸柱を持ち、底部はくびれ、山根は幅は「く」字状に外輪する。	整形は内外面共にナゲで裡かにヘラケズリがある。粘土はやや粗く、砂粒を微量含む。	II 2類	
*-82	*	*	16.8 (20.4) 16.9 3.0	丸底の底盤より、胴部は丸味を持ち、底部はくびれ、山根は幅は「く」字状に外輪する。	整形は内外面共にナゲで裡かにヘラケズリ、指跡がみられる。粘土はやや粗く、砂粒を少量含む。	III A 2類	
*-83	*	*	14.3 (17.3) 16.6 —	胴部下段は欠損する。胴部は僅く丸柱を持ち、底部はくびれ、口縁は外輪する。	整形は外面がナゲ、内面が凹凸ナゲである。粘土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	III A 2類	
*-84	*	*	16.0 (19.6) 17.2	底盤は欠損する。胴部は僅く丸柱を持ち、底部は僅かにくびれ、口縁は外輪する。	整形は外面がナゲでハラ、指跡が胴部に僅かにみられ、内面口縁部にヘラケズリ、他はナゲである。粘土はやや粗く、大粒の砂粒を少量に含む。	III A 2類	
*-85	*	*	16.8 (22.2) 23.8 —	胴部下段は欠損する。胴部が張り出せり、口縁は直立する。やや人型の頭である。	整形は粗く、内外面共にヘラケズリ、指跡、ナゲである。粘土は粗く、大粒の砂粒を多量含む。		
*-86	*	*	13.8 (10.7) —	胴部中段以下は欠損する。胴部はやや丸柱を持ち、底部はくびれ、山根は外輪する。	整形はナゲで、外面口縁に僅かに指跡がみられる。粘土はやや粗く、砂粒を少量含む。		
*-87	*	*	18.8 (12.9) 19.0 —	胴部中段以下は欠損する。底部は丸底で体盤はやや丸柱を持たず、底部はくびれ、口縫は外輪する。	整形は粗く、内外面共に凹凸ナゲである。粘土はやや粗く、砂粒を微量含む。		
*-88	*	上耕器 頭	— (12.0)	胴部中段から上は欠損する。早川の頭で、底部は丸底で体盤はやや丸柱を持ち、表面的に開いて立ち上る。	整形は外面に指跡、内面にヘラケズリが僅かにみられ、他はナゲである。粘土はやや粗く、砂粒を少量含む。		
*-89	*	叩台	全长 13.5 全幅 9.7 全厚 7.3 重量 1345kg	表裏面中央部に赤打痕が僅かにみられる。底部に赤色顔料が付着する。			
*-90	*	脚石	全长 10.5 全幅 9.2 全厚 7.9 重量 1030kg	一端底に赤色顔料が付着する。			

第4節 中・近世

1) 検出遺構

中世の遺構検出面は第V層の上部である。遺構は調査区の北西部で集中が顕著で、柱穴の多くに切り合いが見られる。確認された壠立柱建物は8棟であった。その他に屋敷墓とみられるSK2や掘立柱建物に作る溝状遺構SD1が調査区中央部において、耕地灌漑用と考えられる溝状遺構SD2が調査区東部で北東から南西方向に検出された。遺構の残存状況は調査区の北部では比較的良好であったが、南部及び東部では遺構や包含層が中世以降の耕作等により削平を受けていた(第17図)。

SB1(第18図)

調査区北西部に位置する。K24-25・L24-5グリッドを中心的に検出された。規模は桁行4間7.20m、梁間2間3.60mであり、棟方向はN-46°-Eであった。SB1を構成する柱穴は直径25-50cmのほぼ円形であり、その多くは40cm程度の深さを持つ。埋土は黒褐色土である。それぞれの柱穴の傍に柱穴が存在する事から、1回以上の建て替えがあつたものと考えられる。出土遺物は、土師器・瓦質土器の破片や砥石である。

SB2(第18図)

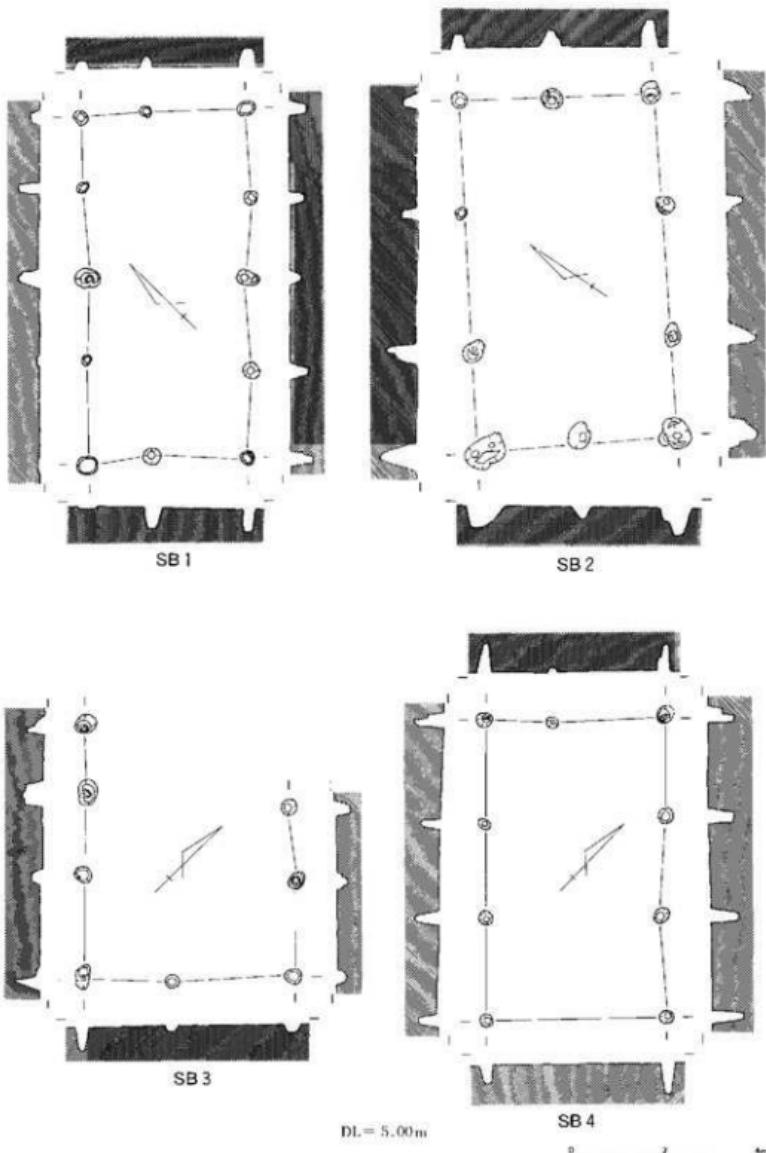
調査区北西部に位置する。K24-25・L24-5グリッドを中心的に検出された。規模は桁行3間7.20m、梁間2間4.00mであり、棟方向はN-52°-Eであった。SB2を構成する柱穴は直径40cmのほぼ円形であり、30-60cmの深さを持つ。埋土は黒褐色土である。それぞれの柱穴に隣接して柱穴が存在する、特にP8、P10では各々3個、4個の柱穴が相接して切り合ひが見られ、数回の建て替えが行われたものと考えられる。出土遺物は、土師器、瓦質土器の鍋等の破片がみられた。

SB3(第18図)

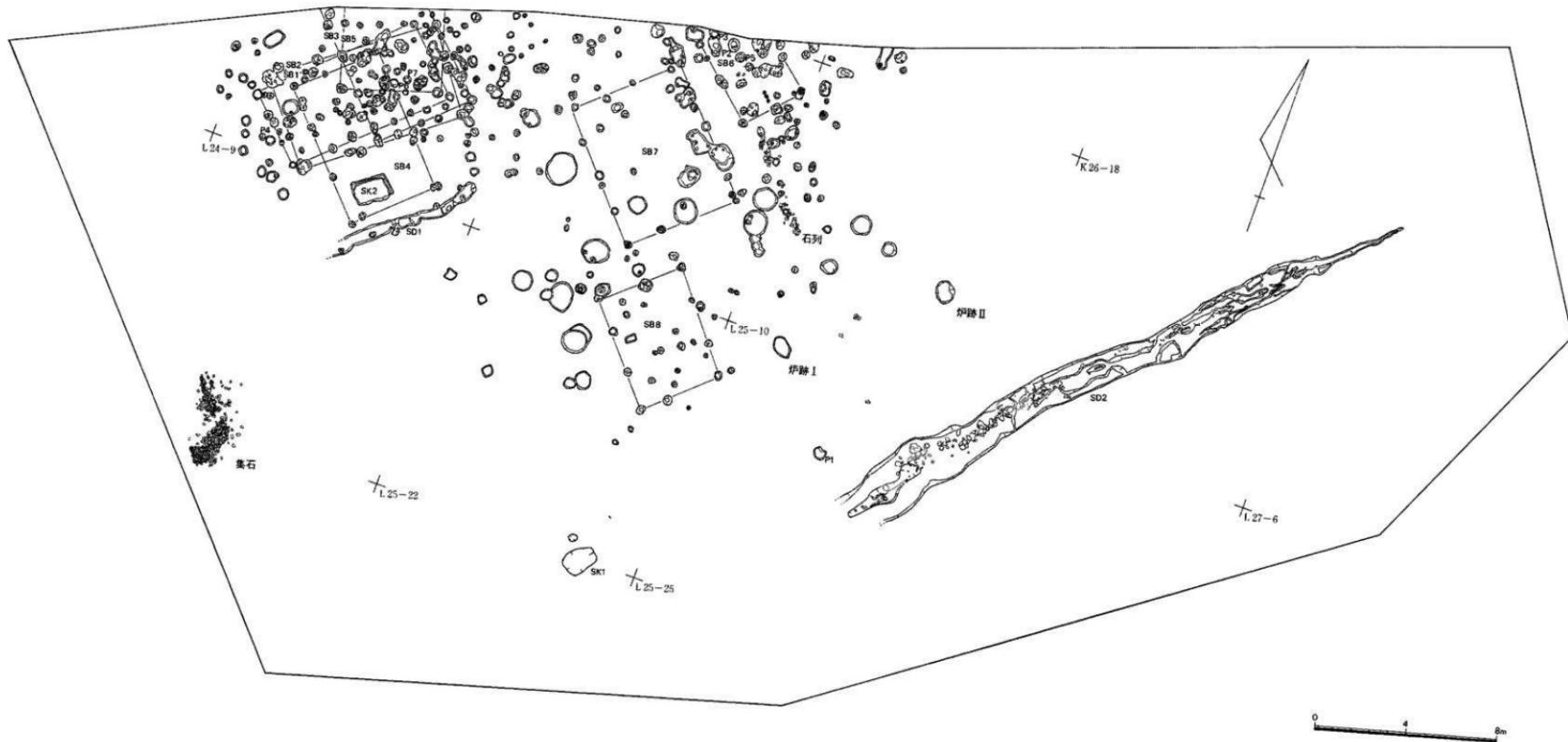
調査区北西部に位置する。K24-25・K25-21グリッドを中心的に検出された。規模は調査区北壁によって造られて全体を確認するには至らなかったが、桁行3間5.20m、梁間2間4.40mであり、棟方向はN-43°-Wであった。SB3を構成する柱穴は直径30cmのほぼ円形であり、その多くは40cm程度の深さを持つ。埋土は黒褐色土である。建て替え等の痕跡は認められなかった。出土遺物は土師器杯や瓦質土器の破片である。

SB4(第18図)

調査区北西部に位置する。L24-5・L25-1グリッドを中心的に検出された。規模は桁行3間6.40m、梁間2間4.00mであり、棟方向はN-42°-Wであった。SB4を構成する柱穴は直径30cmのほぼ円形であり、40-60cmの深さを持つ。埋土は暗褐色土である。P1、P2、P3、P4、P7のそれぞれで隣接する柱穴を持ち、1回以上の建て替えがあつたものと考えら



第18図 SB 1～4 実測図



第17図 中・近世遺構全体配置図

れる。出土遺物は、鍋蓮弁紋を持つ青磁碗、土師器の皿や鍋、瓦質土器の破片、土錘などである。

SB 5 (第19図)

調査区北西部に位置する。K 24-25 グリッドを中心に検出された。SB 5 の規模は棟方向を N-16°-W とすると、桁行 2 間 3.20 m、梁間 3 間 4.00 m である。SB 5 を構成する柱穴は直径 25-40 cm のほぼ円形であり、その多くは 40 cm 程度の深さを持つ。埋土は黒褐色土である。P 2、P 3、P 5、P 6において隣接する柱穴の存在を確認する。出土遺物は鍋蓮弁紋を持つ青磁碗、土師器の杯、瓦質土器の破片である。

SB 6 (第19図)

調査区東側の北壁際に位置する。K 25-19 グリッドを中心に検出された。SB 6 の規模は棟方向を N-47°-W とすると、桁間 2 間 4.00 m、梁間 2 間 2.80 m である。SB 6 を構成する柱穴は直径 30 cm のほぼ円形であり、深さ 30-50 cm である。埋土は黒褐色土である。明らかな建て替えの痕跡は認められないが、P 5 には隣接する柱穴が存在する。出土遺物は青磁、土師器の鍋、瓦質土器の鍋の破片や砥石がある。

SB 7 (第19図)

調査区中央の北部に位置する。K 25-23 グリッドを中心に検出された。規模は桁行 4 間 6.40 m、梁間 3 間 5.20 m であり、棟方向は N-42°-W である。SB 7 を構成する柱穴は直径 25-40 cm であり、深さは 15-40 cm である。埋土は暗褐色土である。出土遺物は東幡系須恵器の片口、土師器の鍋や杯、瓦質土器である。

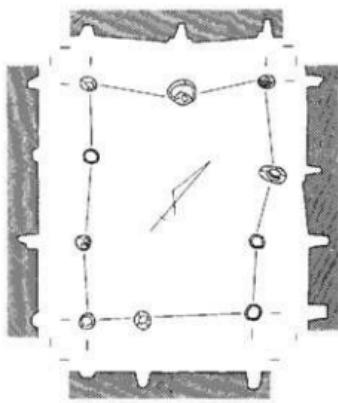
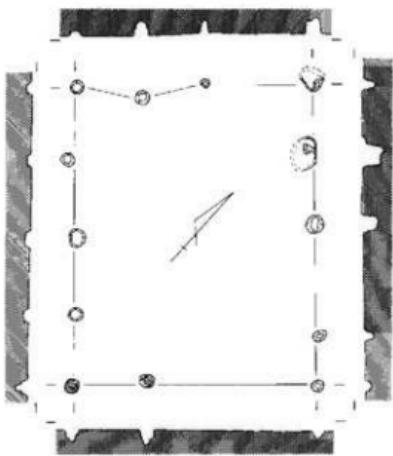
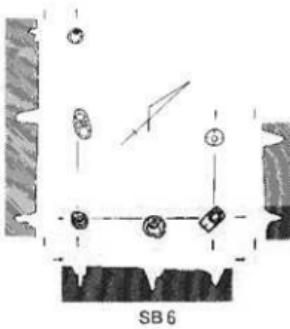
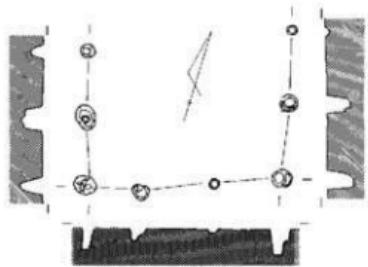
SB 8 (第19図)

調査区中央部に位置する。L 25-9 グリッドを中心に検出された。規模は桁行 3 間 5.00 m、梁間 2 間 3.60 m であり、棟方向は N-40°-W である。SB 8 を構成する柱穴は直径 30-50 cm であり、深さ 10-40 cm である。埋土は黒褐色土である。SB 8 の北側に梁の柱穴に対応する様柱穴が存在する事から建て替えの可能性も考えられる。出土遺物は、土師器の鍋、瓦質土器の破片である。

調査区の北西部には全柱穴の約 3 分の 2 が集中し、柱穴の切り合いが多くみられる。同時期に数棟の住居が存在したにせよ、比較的長期に亘ってこの位置を占めていたものと思われる。掘立柱建物の棟方向においては、N-50°-E と N-42°-W とに大きく分ける事ができる。柱穴の切り合いを観察すると前者の方がやや古いものと思われる。

SD 1 (第17図)

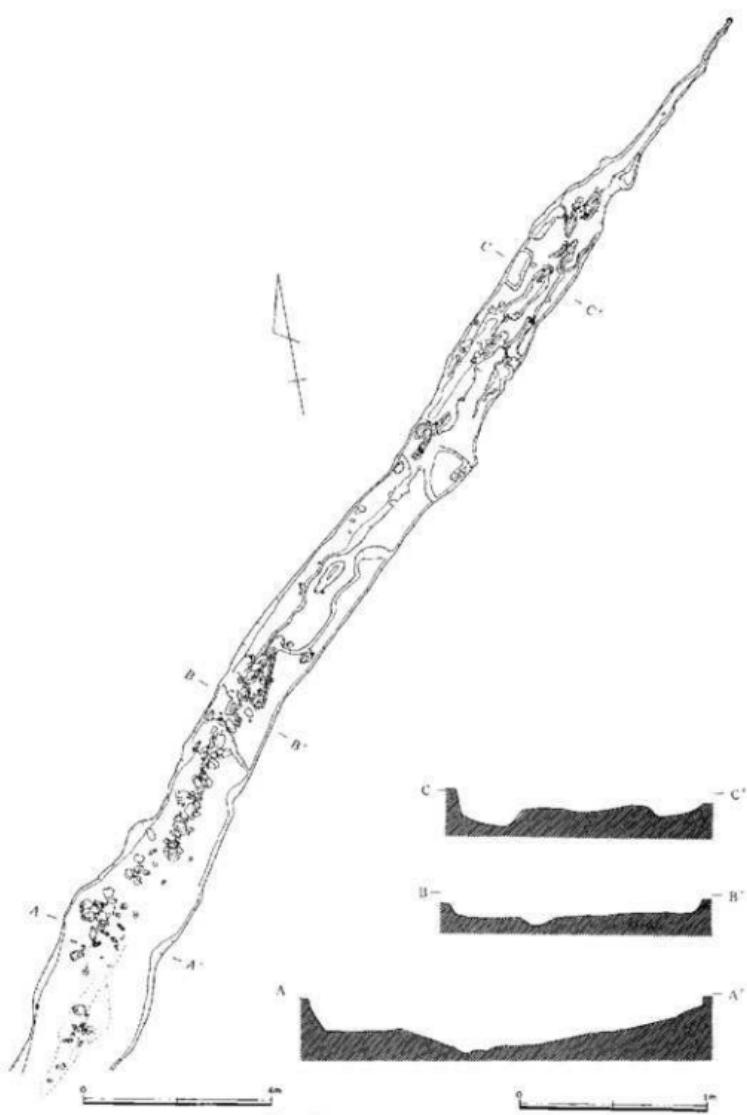
調査区の北西部、今回検出した柱穴群の南端に位置する。住居を区画する溝か、北側に隣接する土塙墓と関係あるものと考えられる。L 25-1、L 25-6 グリッドを中心に検出された。北東から南西に流れる溝である。規模は幅が約 40 cm であり、深さは中央部分で約 10 cm であ



0 2 4 m

DL = 5.00 m

第19図 SB 5～8 実測図

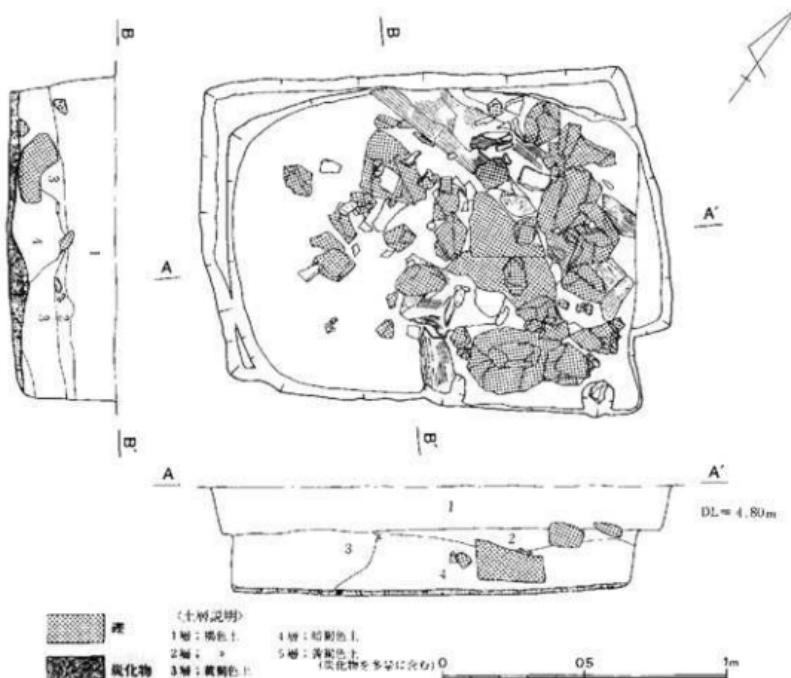


第20図 SD2 実測図

った。南西側は試掘調査時に搅乱を受けたため検出できなかった。北西側は溝の痕跡を確認することはできず、人為的に掘削されたSD1はここを端部とする。出土遺物は上師器の羽釜、丸貫土器のコ小鉢や碗、常滑焼の壺の体部破片が出土している。この常滑焼の壺はSK2からも同一個体のものと思われる破片が出土している。埋土は黒褐色土である。

SD2(第20図)

調査区の東側で検出する。K27-11グリッドより南西に向いL26-12グリッドに達する溝である。北東側の端部は極く細く検出された。北東部における溝幅の減少はこの溝本来の状況とは考えられず、中世以降の削平によるものと思われる。幅は確認できた部分で最大2.40m、深さ約30cmを測る。溝内には30cm大の礫が多く存在する。埋土は灰褐色土であり、底部に鉄分の沈殿層が存在する。底面はやや複雑な様相を呈している。自然流路と言うよりは人工的



第21図 SK2 実測図

灌漑用水路もしくは、住居地を区割する目的の溝と考えられる。出土遺物は土師器の杯、須恵器の甕体部、常滑焼の甕体部破片等が出土している。

SK 2 (第 21 図)

調査区北西部で柱穴群の南端にあり、同時期の埋土を有する SD 1 の北隣に位置する。L 25-1, L 25-6 グリッドを中心に検出した。可成り鋭い角を持つ方形のプランを呈し、長軸約 1.60 m、短軸 1.20 m であり、軸方向は N-48°-E である。東壁と西壁の半ばに段部を有し二段掘りの様相を呈する。検出時の埋土は黒褐色土である。土壤内はやや東に片寄り遺物等を出土する。壌内より検出した石は 5 cm 程度のものから最大で 40 cm 程度あり、部分的に熱を受けた痕跡を有する。これらの石は 3 個程の大きな石を割ったものであり、断面に熱による変化がみられない事から、埋葬時に破碎され埋められたものと思われる。石と共に燃料として使用されたと思われる炭化した木片も多く出土している。土壤の底面では 1-2 cm の炭の堆積がみられた。出土遺物は、青磁の碗、白磁、土師器の鍋、瓦器の椀、常滑焼の甕等の破片が出土している。この内、青磁碗、土師器鍋は埋葬時に鉢かれて埋められたものと思われる。

集石 I (第 22 図)

調査区西端で検出された河原石の集中部分である。L 24-18, 19 から 24 グリッドに亘って半円の形態を呈していた。10-20 cm 大の石が多くを占めている。標高 4.50 m から 5.00 m 内で約千個余りの石を検出する。西壁の外側にも統くものと思われるが、掘り込み等のプランは検出できない。遺物としては瓦の出土を見る。



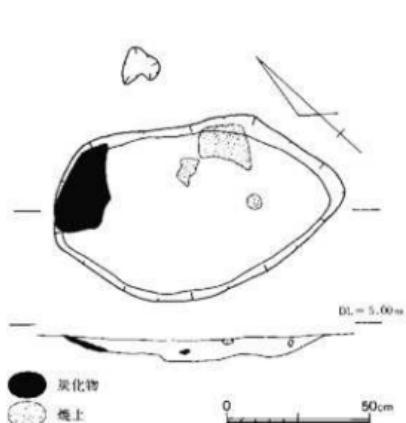
第 22 図 集石平面実測図

炉跡 I (第 23 図)

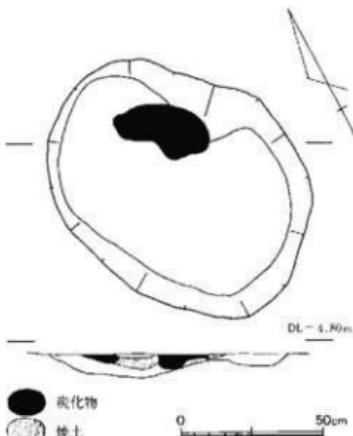
調査区中央部に位置する。L 25-10 グリッドを中心検出する。規模は長径 1.00 m、短径 0.60 m の楕円形を呈し、検出面より中央部で 8 cm の深さを測る。長軸方向は N-46°-W である。主たる埋土は焼土、炭を含む褐色土であり、部分的に炭化物が底面に見られる。検出時の標高は 4.85 m である。

炉跡 II (第 24 図)

調査区中央部やや東寄りに位置する。K 26-22 グリッドで検出された。長径 1.00 m、短径



第23図 炉跡I実測図



第24図 炉跡II実測図

0.80 m の梢円形を呈し、深さ 8 cm を測る。長軸方向は N-33°-W である。主たる埋土は褐色土であり、焼土と炭化物を混入する。検出時の標高は 4.75 m である。(藤方)

石列 I (第17図)

調査区中央部に位置する。K 25-19, 24 グリッドを中心検出された。標高 5.00 m において、最大で 30 cm 大の縁を有する。石列の方向は N-40°-W であり、幅は 1 m を越えない。木川の畦等に使用されたものか、中世の掘立柱建物 SB 7 に伴うものとも考えられる。同時に出土した遺物は、土師器の鍋、羽釜、常滑焼の焼体部破片が出土している。

2) 出土遺物

柱穴群からの出土遺物 (第25図1~6, 9~11)

1 は常滑焼の人甕口縁部破片であり、P1 からの出土である。口縁部が肥厚し縁部に凹線状の産みを持つ N 字状口縁を呈する。常滑編年の第Ⅳ期に相当する。

2, 3, 5, 6 は土師器の小皿であり、それぞれ P2, P3, P4, P5 からの出土である。2, 3 は底部外面に回転糸切り痕を持ち、体部は口縁端部に向って直線的に立ち上がる。5 は回転台成形であり、底部端から直線的に口縁端部に向って立ち上がる。6 は手づくね成形であり、底部から内湾気味に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部外面で撫でによる面を成す。

9, 10 は土師器の杯であり、P6 からの出土である。9 は体部が底部端から内湾気味に立ち上

がり口縁部でやや外反する。内面にロクロ目を残す。10は回転台成形であり、体部は直線的に立ち上がる。

11は口禿の皿であり、P7からの出土である。平坦な底部から体部は直線的に立ち上がり口縁端部で外傾する狭い面を成す。空色を帯びた白色を呈す。

SB7(第25図4)

4は上師器の小皿であり、SB7を構成する北東隅のP1からの出土である。底部外面に回転糸切り痕を持つ。体部は口縁部に向って直線的に立ち上がり、端部を丸く修める。

SD1(第25図16,17)

SD1からの出土遺物で実測できたものは以下の2点である。

16は、土師器の手捏ね上器である。内面に指頭による縦方向の撫でがみられ、外面の一部に煤の付着が認められる。古墳時代祭祀跡から出土のものと同形態と思われる。17は東幡系のコネ鉢である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反し端部を摘み上げる。

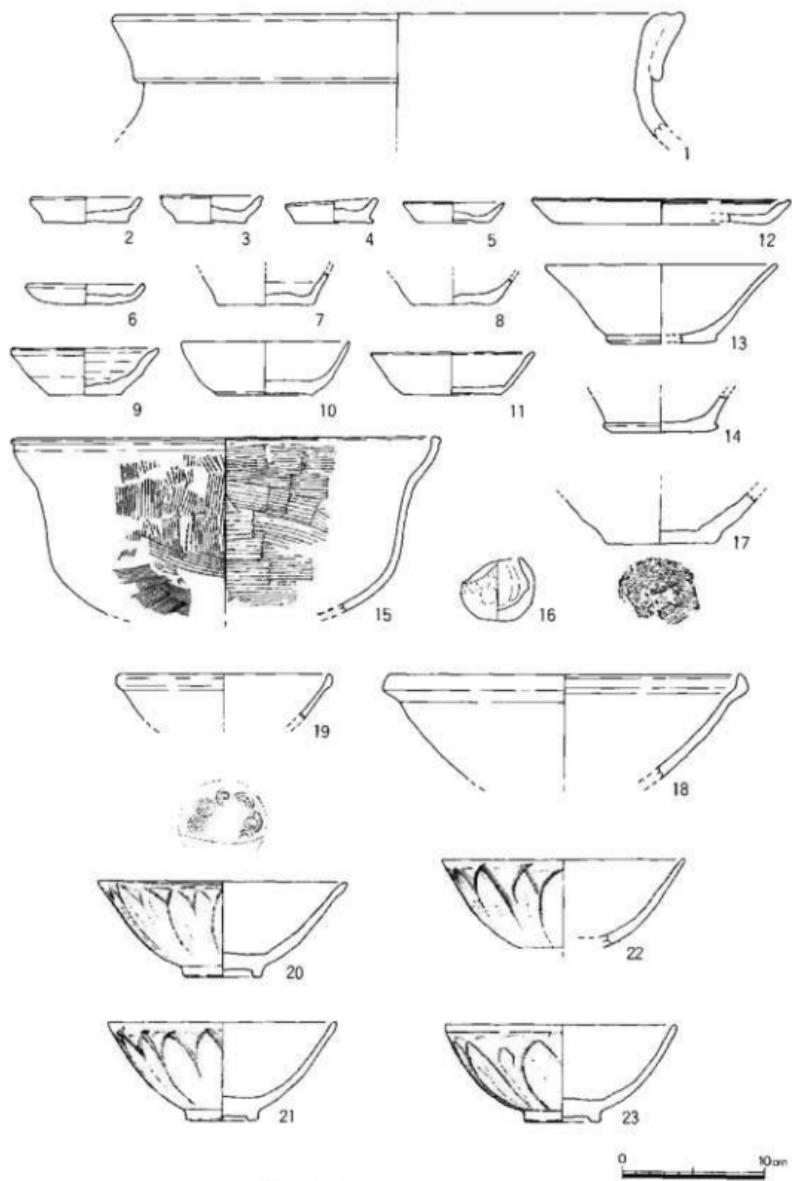
SK2(第25図15,19~23)

15は土師器の鍋である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は外傾する面を成す。内面は横方向の刷毛、外面は縦方向の刷毛を施す。備前型の鍋である。

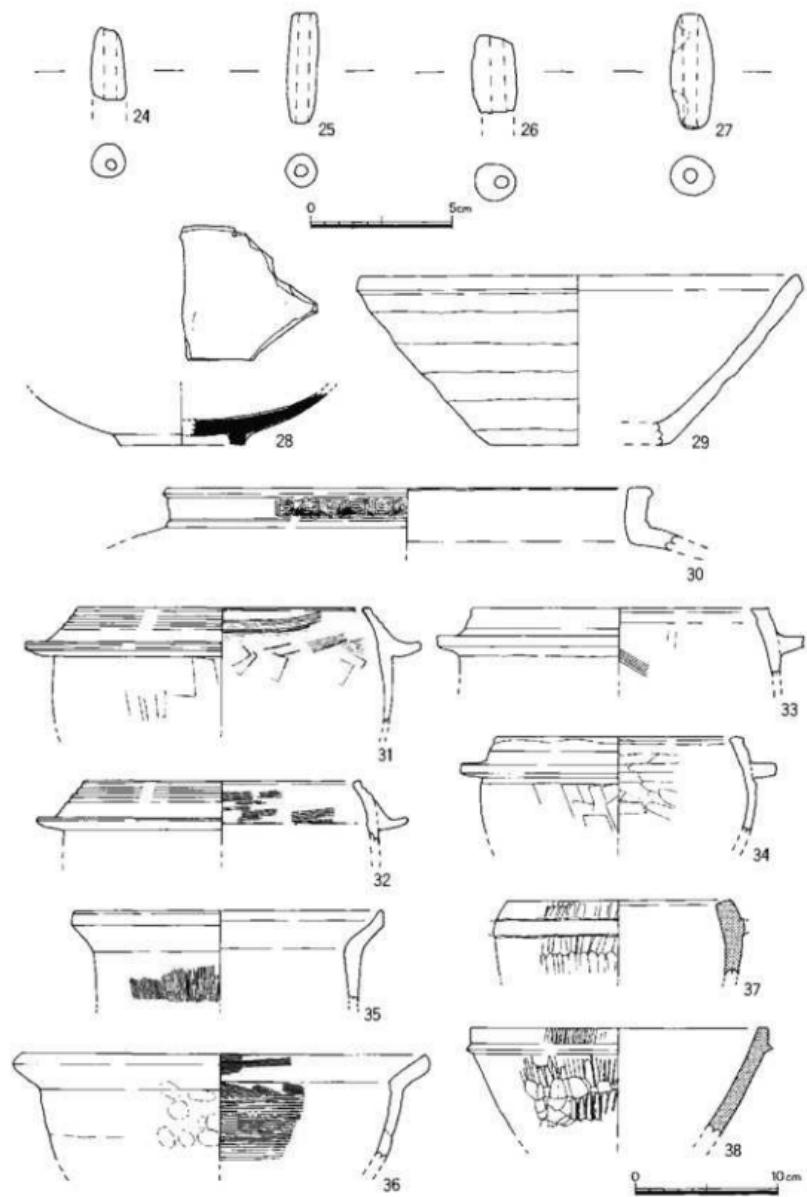
19は白磁の碗であり、IV類に相当するものである。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で正縁状を呈する。20~23は何れも龍泉窯系の青磁碗である。体部外面に鶴蓮弁紋を持つ。19は内面に孔雀を表すと思われる模様を見る。

遺構外の出土遺物(第25~27図12~14,18,24~42)

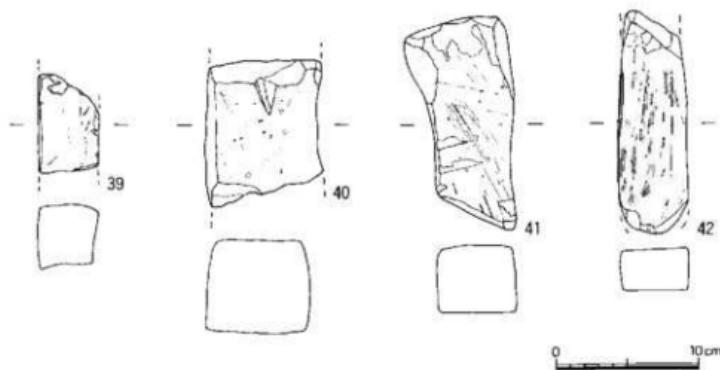
7,8は土師器の杯である。8は底部外面に回転糸切り痕を持つ。12は上師器の皿である。口縁部で外反する。13・14は土師器の椀と杯である。双方共底部外面に竪切り痕のある円盤高台を持つ。18は底部外面に回転糸切り痕のある東幡系鉢である。28は伊万里焼の盤である。内面に芭蕉の模様を見る。29は瓦質上器のこね鉢である。30は瓦質の風炉である。法賀寺遺跡出土の風炉と同形態のもので、口縁部外面に雷紋を施す。31~34は羽釜である。31・32は上師器であり和泉・河内型のものである。33は土師器であり、34は須恵器の焼き上がりを呈したものである。35は土師器の甕である。36は備前型の鍋である。37・38は滑石製の石鍋である。37は体部が内湾するものであり、38は直線的に外上方に立ち上がるものである。24~27は上鍤である。39~42はIV層より出土の砥石である。39~41は泥質砂岩製、42は泥岩製である。(藤方)



第25図 中・近世遺物実測図(1)



第26図 中・近世遺物実測図(2)



第27図 中・近世遺物実測図(3)

種別番号	通番番号	器種	口径 器高 法量 (cm)	形態・文様	手 法	考
25-1	P1	内器 大裏	40.0 18.89 —	口部外縁を折り、 底部外縁に圓弧形切り崩を持つ。 直線的に立ち上がり口縁端部に立 る。	内外面共横方向のナメ調整。	費治地。
*-2	P2	土師器 小皿	8.0 1.8 6.0	底部外縁に圓弧形切り崩を持つ。 直線的に立ち上がり口縁端部に立 る。		回転台成形
*-3	P3	土師器 小盤	7.0 1.9 — 4.8	底部外縁に圓弧形切り崩を持つ。 直線端からやや内凹端に向かって 立る。口縁端部でやや外反する。	外面クロチテ調整	回転台成形
*-4	SD7 P1	土師器 小皿	5.4 1.5 5.6	底部外縁に圓弧形切り崩を持つ。 直線的に口縁端に向かって立 る。口縁端部は丸くおさめる。		回転台成形
*-5	P4	土師器 小皿	7.2 1.4 — 5.0	底部端から直線的に口縁端に向 かって立ち上がる。口縁端部を丸くお さめる。		回転台成形
*-6	P5	土師器 小皿	8.2 1.4 — —	底部から内凹端端に立ち上がる。	内面はナメ調整。	手つくね成形
*-7	V6	土師器 皿	8.8 2.4 — 6.6	半切な底端から体部は直線的に立 ち上がる。	内面はクロロ目を残す。	回転台成形
*-8	V7	土師器 杯	— 1.8 — 5.8	底部外縁に圓弧形切り崩を持つ。		回転台成形
*-9	P6	土師器 杯	10.4 3.3 — 5.2	底部外縁に圓弧形切り崩を持つ。 直線端から内凹端端に立ち上がる 体部。口縁端部でやや外反する。	内面クロロ目を残す。外面口縁 端で横方向のナメ調整。	回転台成形
*-10	V8	土師器 杯	11.8 3.8 — 6.8	平則を加減を持ち。体部は直線的 に立ち上がる。		回転台成形
*-11	P7	白磁 瓶	11.4 3.0 — 7.0	体部は直線的に立ち上がり口縁 端でやや外反する。口縁端部は外 輪する長い曲を成す。	黄灰色を帯びた口先の内面	
*-12	表深	土師器 皿	18.0 1.7 — 14.4	底部外縁に深切り崩のある凹腹状 高台を有し。体部は直線的に立ち 上がり口縁端に向かってやや外反す る。	内外面クロチテ調整。	回転台成形
*-13	V9	土師器 杯	16.4 5.5 — 7.8	底部外縁に深切り崩のある凹腹状 高台を有し。体部は直線的に立ち 上がり口縁端に向かってやや外反す る。		回転台成形
*-14	V10	土師器 杯	— 2.6 — 8.1	底部外縁に深切り崩のある凹腹状 高台を有し。体部は直線的に立ち 上がり口縁端に立つ。		
*-15	SK2	土師器 鍋	29.6 12.50 —	体部は内凹して立ち上がり。口縁 部で外反する。口縁端部は外輪す る面をなし。	外面上加て腹方向の筋毛。下部 で横方向の筋毛。内面横方向の 筋毛を残す。	
*-16	SD1	土師器 杯	4.4 4.5 —	内面は押頭によるナメ。外面側 部に筋を残す。外面において足 部分に筋が付着。	手つくね成形	

種別番号	通構番号	器種	口縁 基部 幅 (cm)	形態・文様	手 法	備考
25 - 17	SD 1	こね鉢	24.6 (7.4) — —	体部はやや内凸気味に立ち上がり。内外面はヨコナギ調整。特に口縁部で外反し、口縁端部で立ち上る。	東晩系	
* - 18	V型	鉢	24.6 (7.4) — —	底部外面に倒輪舟切り模を持つ。平坦な底部から体部は直線的に外方に立ち上がる。	外面はヨコナギ調整。	東晩系
* - 19	SK 2	白磁 鉢	15.0 (3.2) —	口縁端部で毛輪状を呈す。		白磁鉢のV型
* - 20	SK 2	青磁 鉢	17.5 6.8 — 5.6	体部はやや内凸気味に立ち上がり。口縁部でやや外反する。外面に輪進井紋を施す。		青磁鉢
* - 21	SK 2	青磁 鉢	16.1 7.0 — 5.2	体部はやや内凸気味に立ち上がり。口縁端部に平ら。外面に輪進井紋を施す。		青磁鉢
* - 22	SK 2	青磁 鉢	17.1 (6.2) — —	体部はやや内凸気味に立ち上がり。口縁部でやや外反する。外面に輪進井紋を施す。		青磁鉢
* - 23	SK 2	青磁 鉢	16.2 6.9 — 5.4	体部はやや内凸気味に立ち上がり。口縁端部に平ら。外面に輪進井紋を施す。		青磁鉢
26 - 28	表模	組合 盤	— (3.6) — 9.0	底部からやや内凸気味に立ち上がる。	内面は輪の草花紋を施し、黄赤色。外面空色を呈す。	伊万里焼
* - 29	V型	瓦質土器 こね鉢	33.6 11.9 — 13.0	体部は底端部から外方に直線的に立ち上がる。口縁端部は外斜する面を成す。	内外面とも毛調整。	
* - 30	V型	瓦質土器 鍋(6)	31.2 14.4 — —	肩部から裏面に立ち上る口縁を持つ。口縁端部で平らな面を成す。	口縁端外面に面紋を施す。	
* - 31	V型	土器器 刷毛	20.6 (8.2) — —	腹部から口縁部にかけて内凹し、肩部に輪の狭い窪が付く。	口縁部外面に円錐狀の段が付く。 腹部の外面窪削り、口縁部内面毛調整。	和泉・河内型
* - 32	V型	土器器 刷毛	19.0 14.6 — —	肩部から口縁部にかけて内凹し、口縁端部で狭い窪を成す。肩部に輪の狭い窪が付く。	口縁部外面はナガ調整を施し、 円錐狀の段が付く。内面は刷毛調整。	和泉・河内型
* - 33	V型	土器器 刷毛	20.8 (4.8) — —	輪花部から口縁部にかけて内凹し、口縁端部は半らな面を成す。口縁部に断面長方形の窪が付く。	口縁部内外面強いヨコナギ調整	
* - 34	V型	瓦質土器 刷毛	16.0 16.9 — —	腹部から口縁部にかけて内凹し、口縁端部は半らな面を成す。口縁部に断面長方形の窪が付く。	内面は指痕によるナガ、外面は 輪削り、口縁部ではヨコナギ調整。	須磨製を表す。
* - 35	V型	土器器 樂	21.6 (6.5) — —	肩部から口縁部は直線的に外上方に立ち上る。口縁端部で上方に立ち上り、外側は半らな面を成す。	口縁部内面で横方向の刷毛後ナ 子。外面ではヨコナギ。外側外面 横方向の刷毛調整。	
* - 36	青磁	土器器 鍋	28.8 (7.6) — —	輪花部は内凸気味に立ち上る。口縁部で外上方に立ち上る。	輪花部内面は横方向の刷毛後ナ 子。外面は指痕仕事が残る。口縁部内面 は横方向の刷毛後ナ子。外側は 横方向のナガ調整。	

標印番号	通標番号	器種	口径 器高 法算 (cm) 測定 基準	形態・文様	手 法	備 考
× - 37	V型	石製 鍋	15.8 (5.5) — —	断然から口縁部にかけて内凹し、 口縁端部は内傾する平らな面を成 す。 —	外面に彫状工具による削り痕。	滑石製
× - 38	V型	石製 鍋	21.0 (7.7)	断然から口縁部にかけてやや内凹 弧形に立ち上がる。口縁端部は平 らな面を成す。口部において断面 に三角形の溝を削り出す。	外面に彫状工具による削り痕。	滑石製

標印番号	通標	器種	全長 (cm)	直 径 (cm)	孔 径 (cm)	重 量 (kg)
26 - 24	V型	L鍤	2.5	1.2	0.4	2.9
× - 25	直標	+	3.9	1.0	0.4	4.4
× - 26	直標	+	(2.7)	1.5	0.5	4.7
× - 27	V型	+	4.0	1.5	0.5	6.8

第4章 総括

縄文時代については晩期の中村Ⅱ式に含まれる刻み目突蒂文土器が数点と、それに伴うと考えられる打製石斧が1点出土しているのみであり、遺構の検出には至らなかった。弥生時代は今回の調査では前期末と考えられる高坏、そして中期から後期にかけての壺類が出土している。これらは明確な遺構に伴って出土したものではなく、炭化物集中地点の周辺域から比較的續まって出土したものである。青灰色粘土層中よりの出土であり、文化層の明確な分層は不可能ではあったものの、それぞれ時期的差異により、若干のレベル差があったことが看取される。高知県の西部地域に於いては、弥生時代の該期の資料は少なく、今後の検討にゆだねられる。

古墳時代については、前年度に続き祭祀跡を3ヶ所検出している。SF 19は前年度の祭祀集中地点の縁辺部にあたる。須恵器大甕を中心とし、須恵器壺・蓋、甕、高坏及び土師器甕、高坏、甕、そして祭祀遺物白玉で構成されている。SF 20・21は前年度調査区より上流域に新たに祭祀跡が展開していることが判明している。共に広範囲に遺物が散在する状況を呈しており、中心的な集中箇所は認められなかった。SF 20の構成遺物は白玉、土玉、土製勾玉、土製模造鏡、手捏ね上器等の祭祀遺物、須恵器壺・蓋、土師器甕、甕等である。SF 21についても同様の器種で構成されている。

中世の遺構は、調査区の北部を中心に検出された柱穴群が主なもので、その数は200個を越える。この柱穴群の中から確認された掘立柱建物は8棟であり、面積20m²から30m²をやや越える規模であり、その棟方向から、概ね二時期に大別することができる。一つは北東方向に主軸を持つものであり、もう一つは北西方向に主軸を持つものである。前者は調査区の西北部分で多く検出され、一棟の建物において度数の建て替えが行われ、尚且棟方向を若干違えた建物が重複することから、一時期と称してもある期間を相当させねばならない。

この柱穴群の南側で検出されたのがSK 2とSD 1の遺構であった。共にその長軸方向を北東とするものである。火葬墓と考えられるSK 2から出土した遺物は、青磁碗（第25図20-23）、白磁碗（同19）、土師器の鍋（同15）、瓦器碗と常滑焼甕の破片等、であった。この青磁碗は鍋蓋弁紋を持つ龍泉窯系のものであり、白磁は第Ⅳ類に属するものである。又、土師器の鍋はその形態から備前型の鍋に分類される。以上の出土遺物から、この被葬者は生前にある程度経済的に安定した生活を送っていた人物であったと考えられ、13世紀後半にこの土壤に葬られたものである。

SK 2の床面には一様な炭の堆積が見られるものの、土壤内から出土した遺物は全て破片であり、燃料として使用されたと考えられる炭化した木片や礫と共に、無秩序に土壤に放り込まれたものである。

土壙内から出土した土師器の鍋も破片であるが、藏骨器としての使用を目的としたものか、被葬者の遺体の一部を覆うためのものと考えられる。

土壙の壁及び床面に熱を受けた痕跡のないこと、明確に入骨と認められるものの出土がなかったことを加味すると、遺体はSK 2以外の場所で荼毘に付された後、骨のみを選び出し他に葬り、その他を副葬品と共に土壙内に埋めたものと考えられる。(藤方・前田)

参考文献

屋敷墓について

- 橋田 正徳 「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』1991年
岡本 健児他 「中一近世小結」『田村遺跡群』第10分冊 1986年

火葬墓・墓地について

- 瀬川 芳則 「中世庶民共同墓地における火葬普及の様相」『日本考古学論集6』(吉川弘文館) 1987年
久保 常晴 「火葬墓の類型と展開」『新版 仏教考古学講座 第7集 墓葬』(雄山閣) 1984年
柳田 國男 「葬制の沿革について」『柳田國男全集12』(筑摩書房)
宮田 登 「墓制と魂の行方」『中世の都市と墳墓』(日本エディタースクール出版部) 1988年

写 真 図 版



調査前全景（北より）



調査風景

写真2 弥生時代



L.26-18・19 グリッド内 出土土器 (北より)



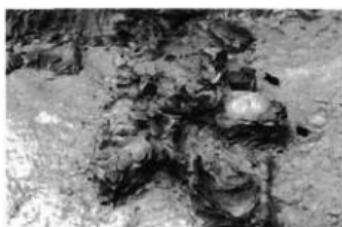
第5図5 出土状況



第7図36 出土状況



L.25-14 グリッド内 出土土器

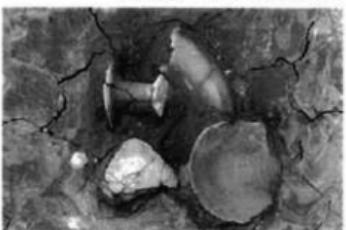


L.25-24 グリッド内 出土土器

写真3 古墳時代祭祀跡



SF 19 出土須恵器（第10区8）



SF 19 出土土師器（第10区15）



SF 19 出土須恵器（第10区8）



SF 19 遺物出土状況

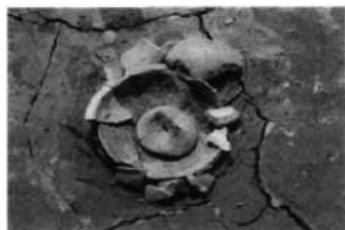


SF 19 遺物出土状況（西より）

写真4 古墳時代祭祀跡



SF 20 出土遺物状況（北より）



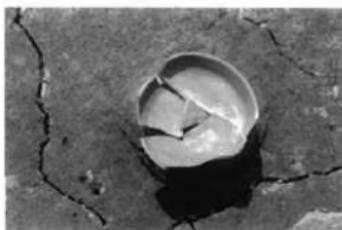
SF 20 出土遺物（第11図31, 51）



SF 20 出土遺物（第11図30, 41, 44, 53）



SF 20 出土遺物（第11図42）



SF 20 出土頃忠器（第11図45）

写真5 古墳時代祭祀跡



SF 21 遺物出土状況（東より）



SF 21 遺物出土状況（東より）



SF 21 遺物出土状況（北より）

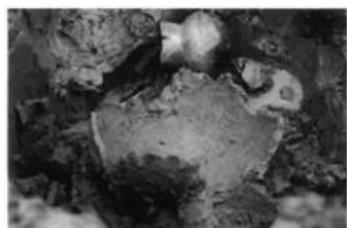
写真6 古墳時代祭祀跡



SF 21 出土遺物 (第14図70)



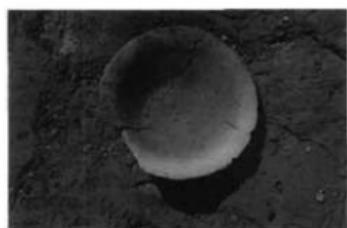
SF 21 出土遺物 (第15図82)



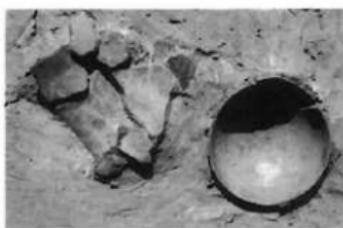
SF 21 出土遺物 (第14図67)



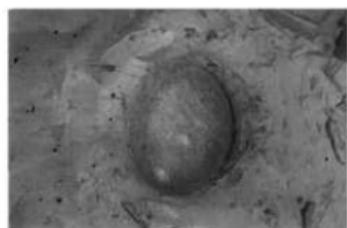
SF 21 出土遺物 (第13図18)



SF 21 出土遺物 (第14図59)



SF 21 出土遺物 (第13図48)



SF 21 出土遺物 (第16図90)

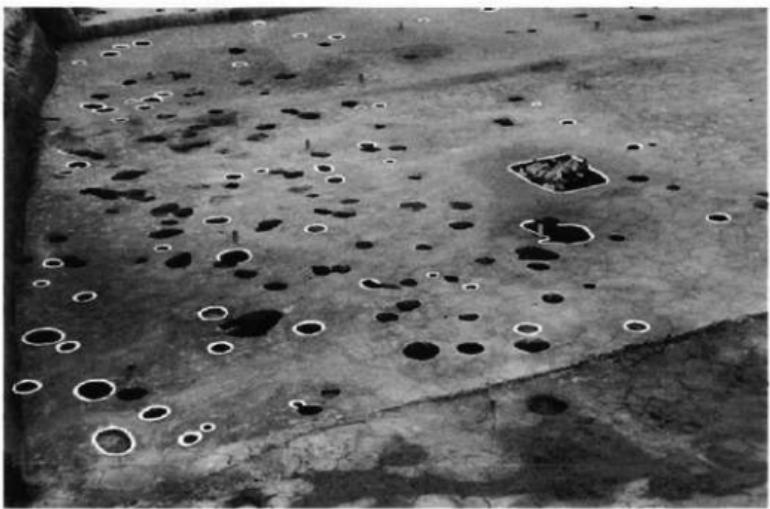


SF 21 出土遺物 (第14図57, 68)

写真7 中世



1区 中世全景 (西より)



1区 中世全景 (西より)

写真8 中世



2区 中世全景（西より）



2区 中世全景（南より）



SK 2 遺物出土状況（南より）



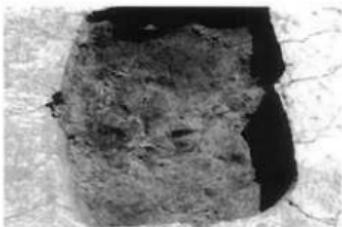
SK 2 出土遺物（青磁）



SK 2 出土遺物（青磁・白磁）

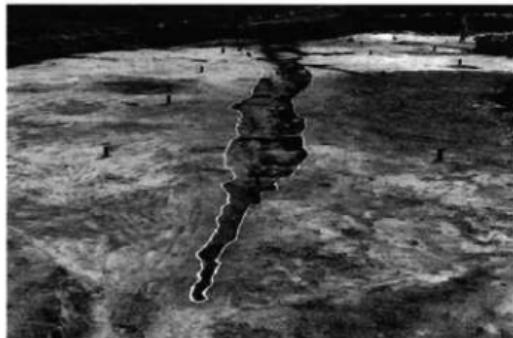


SK 2 出土遺物（白磁）

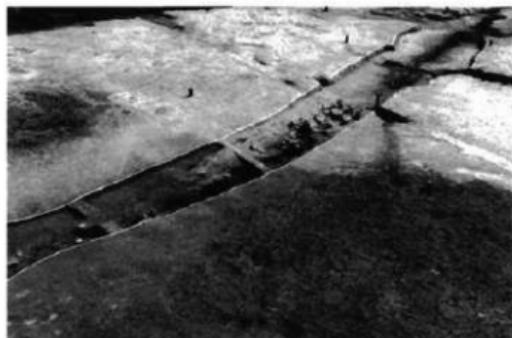


SK 2 完掘状況（西より）

写真 10 中世



SD 2 全景(東より)



SD 2 全景(北より)



SD 2 考古出土状況(西より)

写真 11 繩文・弥生時代遺物



第4図1



第4図2



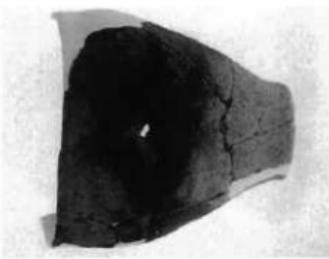
第5図3



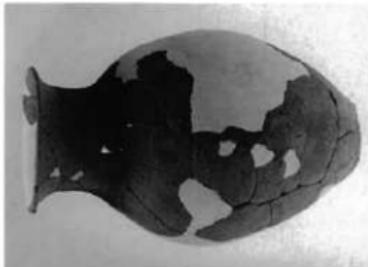
第5図4



第5図12



第6図20



第6図18



第6図28

写真 12 弁生土器



第6図29



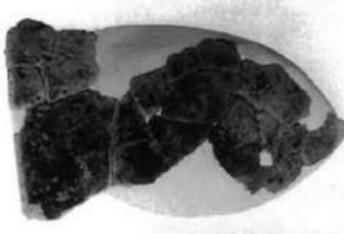
第6図30



第7図31



第7図32



第7図34



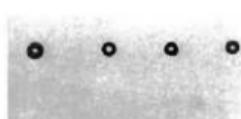
第7図35



第7図40



第7図42



第10図 1~4



第10図 5



第10図 6



第10図 7



第10図 8



第10図 9



第10図 10



第10図 17



第10図 18



第10図 13

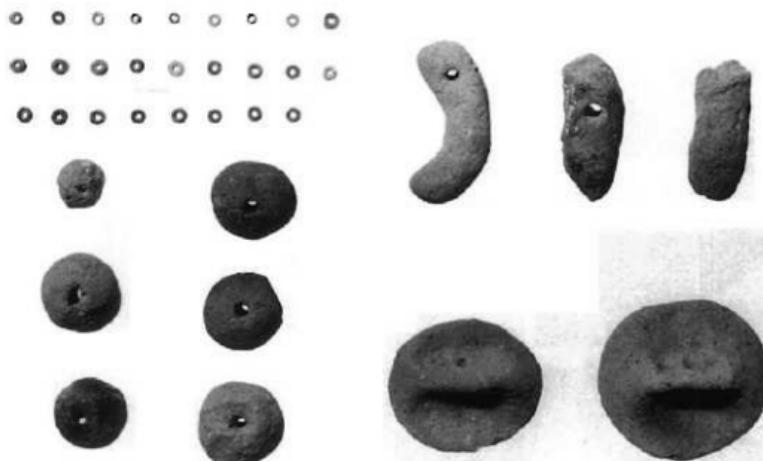


第10図 12



第10図 20

写真 14 SF 20



第 11 図 1~31



第 11 図 38~40

第 11 図 41, 42



第 11 図 45

第 11 図 46

第 11 図 47



第 11 図 48

第 11 図 49

第 11 図 50

写真 15 SF 20



第11図 51



第11図 52



第11図 53



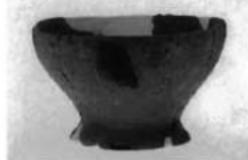
第11図 54



第11図 55



第11図 56



第12図 57



第12図 58



第12図 61



第12図 67



第12図 69



第12図 62



第12図 64



第12図 70

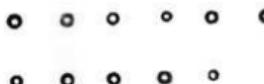


第12図 71



第12図 72

写真 16 SF 21

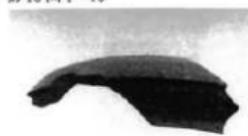


第13図 16~19



第13図 1~15

第13図 20~22



第13図 23



第13図 24



第13図 26



第13図 27



第13図 28



第13図 30



第13図 34



第13図 35



第13図 36



第13図 37



第13図 40



第13図 48



第14図 51



第14図 52



第14図 53



第14図 54



第14図 57



第14図 67



第14図 68



第14図 69



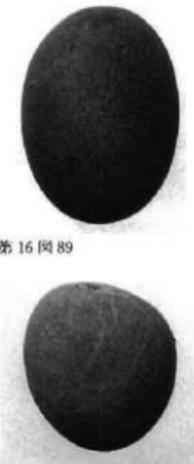
第14図 58



第14図 70



第15図 71



第16図 89



第16図 90

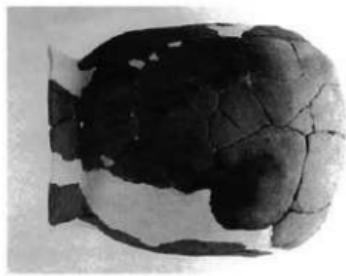
写真 18 SF 21



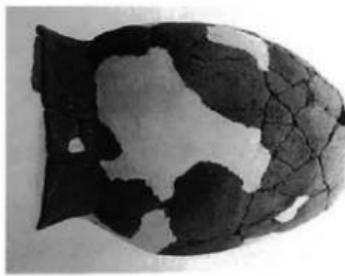
第15図74



第15図77



第15図78



第15図79



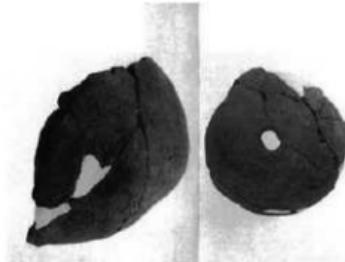
第15図80



第15図82



第16図84



第16図88

写真 19 中・近世



第25図2



第25図3



第25図4



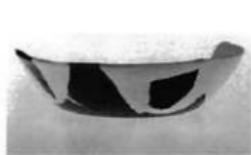
第25図5



第25図9



第25図10



第25図11



第25図12



第25図13



第25図18



第25図19



第25図20



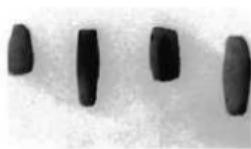
第25図21



第25図22



第25図23



第26図24~27

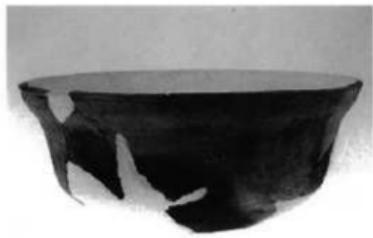


第27図40



第27図41

写真 20 中・近世



第 25 図 15



第 26 図 29



第 26 図 30



第 26 図 34



第 26 図 35



第 26 図 36



第 26 図 37



第 26 図 38

後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

共同中山遺跡群

第2分冊

発行日 1992年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会
高知県文化財活用埋蔵文化財センター

印刷 (株)西村謹写堂